熊山遺跡とヴァン仏教遺跡

会員　丸谷憲二

1　はじめに

中央アジアのタジキスタン共和国にヴァン仏教遺跡がある。タジキスタンは、シルクロードの国際商人として栄えたイラン系民族・ソグド人の本拠地（ソグディアナ）である。西方の諸宗教を東方へ伝来する中継地でもある。仏教のインドから中国への伝来もタジキスタンを経由している。

1.1　タジキスタン共和国

1990 年代に内戦があった。国土の 90%は山岳地帯であり 6,000～7,000m の山々が連なる「世界の屋根」パミール高原を有する国である。北部にはフェルガナ盆地にイスタラフシャン等の古都があり、東部には国土の 45%を占めるゴルノ・バダフシャン自治州 がある。1998 年 7 月、秋野豊（国際政治学者、筑波大学助教授）国連タジキスタン監視団（UNMOT）政務官を含む 4 人の UNMOT 要員が、首都ドゥシャンベ東方の町ラビジャール近くで殉職した。秋野豊氏は、日本政府が国連の要請に基づき、1998 年 4 月よりタジキスタンに派遣されていた。

2　帝釈山霊山寺創建と安如宝

熊山遺跡の隣に天平勝宝（749～757 年）年間に鑑真和尚（688～763 年）の開基伝承を持つ帝釈山霊山寺があった。鑑真に随行して渡来した弟子に中央アジアの出身者がいる。「安如宝」である。「安」とは昭武九姓の一つで、「安国」（ブハラ）の出身者である。ブハラはソグディアナの一大都城である。安如宝はソグド人である。安如宝は建築に造詣が深く、唐招提寺の伽藍造営に多大な功績があった。熊山遺跡とは、ソグディアナに幾つも建っていた石積みの仏塔を安如宝が日本で再現したものと推定される。

3　唐招提寺と安如宝

鑑真の唐招提寺は講堂と僧坊を持つだけの律宗の学問寺であった。鑑真と共に渡来した安如宝が鑑真の意思を継いで伽藍を建てた。如宝は中国人ではなく胡国人であった。つまり西域出身のソグド人である。彼の出身地はプハラで、現在のウズベキスタンである。

ソグド人は中央アジアのシルク・ロードの拠点に住み東西貿易によって栄えた。宗教的に寛容であり、いろいろな宗教を信じる人達がいた。仏教徒も多数いた。西域はアレキザンダー大王に占領され、ギリシャ文化が入ってきた。如宝はギリシャ建築も知っていたのであろう。金堂の正面の柱の数は 8 本あり、アテネのパンテオン神殿と同じである。奈良はシルク・ロードの終着点である。

3.1　安如宝

安如宝（安如保・如保・731～815 年）は奈良・平安前期の律宗の渡来僧である。中央アジアのサマルカンド地方の安国の出身である。鑑真に師事し天平勝宝 6 年（754 年）正月に来日した。774 年に東大寺戒壇院戒和上となっている。一時下野薬師寺（栃木県下野市）に住した。鑑真が没し委嘱により唐招提寺に帰住し、第 4 代住職となり伽藍造営と律宗の高揚に尽力した。

ソグディアナは現在の中央アジア・ウズベキスタンとタジキスタンとの国境地域にあった。ソグド

人たちは交易の民として、西域からトルファン、敦煌周辺に聚落をつくり、西安にまで進出していた。「楊貴妃のお気に入り」安禄山はソグド人軍閥の領袖であったが「安史の乱」を起こし、揚州では多くのソグド人が虐殺された。その生き残りが安如宝である。

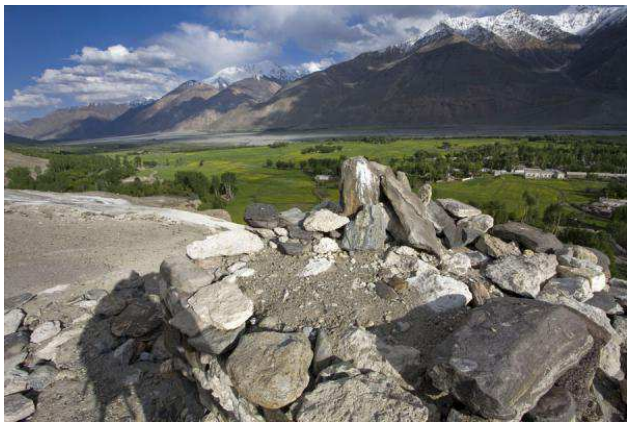
4 ソクド文字と法隆寺

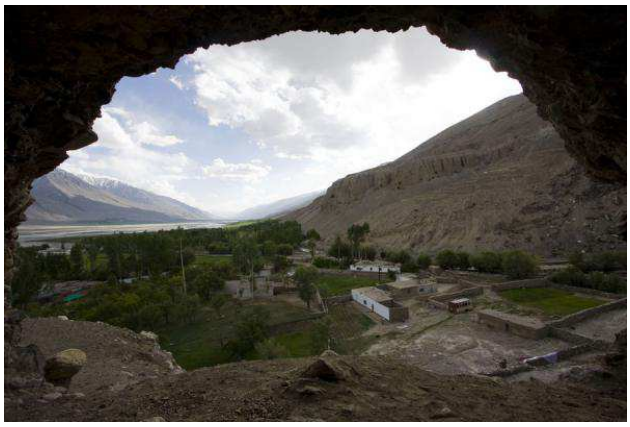
法隆寺献納宝物の香木白檀 2 点に焼印文字が、1986 年に東野治之氏と吉田豊氏（神戸市立外国語大学）によりソグド文字のニーム・スィールと解読された。法隆寺は 607 年建立であり、法隆寺と突厥国との交流記録である。ソグド語は中央アジアにおける交易言語である。中国人商人とイラン人商人との間の共通語でもあった。

ソグド文字からウイグル文字が派生し、ウイグル文字は後にモンゴル文字の元となった。

4 ヴァン仏教遺跡 Tajikistan: Vrang Buddhist stupa

安如宝の生誕地タジキスタン共和国のヴァン仏教遺跡は日本では知られていない。熊山遺跡と最も似ている遺跡である。仏教僧院と石窟の遺跡が残る村の丘の上に基壇が残されている。住居跡や裏山には城砦跡もあり古くから栄えていた。ヴァン仏教遺跡の背後に広がるのがパンジ川とワハーン渓谷である。





5　皮革様固形物の重要性

仙田実氏は「奈良三釉小壷と皮革様固形物は盗掘のさいに同時に取り出された。皮革様固形物は、所在も実態も性格づけも、まったくはっきりしない。」としている。

ヴァン仏教遺跡の写真から、皮革様固形物は「騎馬民族の必需品である羊の胃袋を干して作った皮の水筒」と推定される。突厥国からの渡来

者を証明する最も重要な遺物が行方不明になっている。

6 まとめ

熊山遺跡、霊山寺、安如宝、中央アジア・タジキスタンのヴァン仏教遺跡がつながった。イリ川は、新疆ウイグル自治区北部のイリ・カザフ自治州からカザフスタン南西部のアルマトイ州にかけて流れる川である。天山山脈に源を発し、西に流れバルハシ湖に注ぐ。流域のイリ地方では烏孫、チャガタイ・ハン国、ジュンガルといった遊牧国家が興亡した。イリ・カザフ自治州等のイリ川周辺から渡来した突厥系ソグド人が熊山遺跡を建築し、故郷のイリ川を思い伊里川と命名した。伊里川は流域面積 42.7 平方キロメートル、法河川流路延長 12.13km の二級水系である。イリ川周辺からの渡来人が、伊里の地名の由来である。

7 謝辞

平成 26 年 5 月 24 日開催の熊山遺跡群調査研究会　平成 26 年度総会シンポジュムで横山修尚氏が「鑑真和上と熊山石積遺跡」を発表され、「突厥系ソグド人である安如宝とヴァン仏教遺跡」を紹介された。「岡山県内でのソグド人の業績発表は始めて」である。

参考文献

① 『熊山遺跡・日本・謎の石造遺物紀行　4 岡山編「熊山遺跡」』
http://www.geocities.jp/gur_bahram/msrj/msrj04.htm

② 西遊旅行社
http://www.saiyu.co.jp/special/central_asia/midokoro/tajikistan/index.htm

③『ヴァン仏教遺跡』
http://www.traveladventures.org/continents/asia/vrang-buddhist-stupa06.html

④『元亨釈書』巻第十三　『新訂増補　国史大系第三十一巻』昭和 40 年　吉川弘文館

⑤『吉備国の語源「黄蕨」と羈縻（きび）政策「熊山遺跡出土品」の考察』丸谷憲二　平成 22 年 4 月 17 日

⑥『キルギス共和国と日本』丸谷憲二成 23 年 8 月 13 日

⑦『唐招提寺』
http://www.geocities.jp/general_sasaki/nara-toshodaiji-ni.html

⑧『シルクロードの光と影　日本とシルクロード(5)　唐招提寺の住職はソグド人だった』
http://silkroad-j.lomo.jp/nittyu/nittyu23.htm

⑨『シルクロードの民族音楽の興亡』
http://uruseiyatsura.blog62.fc2.com/blog-entry- 118.html

⑩『幸崎川・伊里川水系等河川環境管理基本計画』平成 10 年　岡山県

⑪『岡山県清流保全地域別指針地域編　おかやま清流ガイドライン』平成 9 年　岡山地域振興部環境保全局環境指導課

編者コメント

今回の丸谷憲二氏の寄稿文も我々には聴きなれないテーマです。写真の殆どが上記参考文献のインターネットによるものだそうです。詳しくはインターネットの検索で調べてください。

山崎泰二　記

「延原家・井上家」の史的考察

会員　田中康之

一、はじめに

田中康子（編者注　筆者の奥さん）の実家である延原家と実母・延原小塩の実家井上家についての歴史的な記録によるご先祖の起源に関する研究成果を記述して後世の為の資（し）としたい。

これから目を通す各資料を理解するために、先ずその要点を記し、次に各資料（後記資料1～4及び別添参考資料1～2）を紹介したい。 これらの史実により、「延原家」「井上家」のご先祖の方々が時代の波に翻弄されながらも、その時代その時を命懸けで生き抜いてこられて、現在の我々子孫にまで「命・いのち・生き血」を脈々と繋ぎ続けて下さっている事に思いを致し、心に銘記し、重ねて「深い感謝と合掌の一念」を心から捧げなければならないと思う。

これから、記述する数々の詳細な史実は、全て後記する先史古代研究会・山崎泰二氏（岡山歴史研究会副会長）との奇しきご縁を戴いた事に起因するものである。山崎氏のご指導に深く感謝して「延原家」「井上家」についてのご先祖の歴史的資料に基づき、実地調査も含めて説明しよう。

二、南朝美作七忠臣並（なんちょうみまさか）

忠死二十人総忠魂碑

「南朝美作七忠臣並忠死者二十人総忠魂碑」平沼騏一郎（きいちろう）・謹書　岡山県久米郡久米南町の浄土宗開祖・法然上人の誕生寺・境内に昭和9年7月に建立され、その後平成7年に「誕生寺第二駐車場」に移設された、この「南朝美作七忠臣並忠死者二十人総忠魂碑」の建設費寄進者名を記した銅製銘板「原田佐秀後裔・縁故者」に、刻印されている住所・氏名の中に「小原・延原鞏男（かたお）・同令（令室・延原小塩）」と、田中康子（旧姓延原）の父母の氏名が克明に刻まれている。

総忠魂碑の前にて　筆者夫妻

この「総忠魂碑」についは、私の若き時代今から約57年前の「思い出」からスタートするのである。それは、昭和32年夏、私の妻・田中康子（旧姓延原）のご両親に結婚のお許しを戴く為に、岡山県久米郡中央町小原（現在の久米郡美咲町小原）の延原家を訪問した時の事である。大歓迎を受け、ご両親のご快諾を戴いた。その折に、お父様から「私の延原一族の遠い先祖の事で、ご案内したい処があります。」と約2㌔南西にある浄土宗の開祖・法然上人の生まれた誕生寺境内にある「南朝美作七忠臣並忠死者二十人総忠魂碑」に詣でた。

お父様は、「私達延原一族は南朝・後醍醐天皇に忠誠を誓い京都で、時の北条幕府と奮迅の戦して忠死した原田三河守佐秀の後裔・縁者で。この総忠魂碑の建設費を寄進しまし」、銅板製の銘板に刻まれている寄進者のご両親の名前を説明されました。その後、この事は私の頭の片隅に記憶していましたが、それ以上の詳細な事は先史古代研究会の山崎氏とのご縁を戴くまでは判りませんでした。

三、真光寺の「贈・従五位原田佐秀(すけひで)の碑」

岡山県真庭郡木山大字鹿田真光寺(現在、真庭市落合町鹿田 216)に建設されたと「梅花餘香(よこう)」に記録されている、原田佐秀の碑の建設費寄進者を記した銅製銘板の中に「小原・延原喜佐衛門」の名前がある。この延原喜左衛門は、田中康子の祖父・延原彦左衛門の本家の長男であり、久米郡加美村大字小原(現在の久米郡美咲町小原)の地で屋号・塚之元と呼ばれ、庄屋を勤め、代々に亘り苗字帯刀を許されていた。また代々「院殿・大居士」の戒名を授与されている家柄である。その分家・延原彦左衛門(田中康子の祖父)の家系もまた同様に「院殿・大居士」の戒名を授与されている。

この真光寺真宗・佛光寺派の・守城俊道住職に電話にて、境内にあると思われる原田佐秀碑の現状についてお尋ねしたが、ご住職は「境内に無い。先代の住職からも聞いた事は無い。」とのご返事でした。・・・時の流れは如何ともしがたし。これからの郷土史研究の課題の一つでしょう。

前記の「梅花餘香」は、原田佐秀が従五位(じゅうごい)の官位を授与された事を祝し、併せて美作菅家七流のうち官位を授与された七人及び忠死者二十人の名誉を祝し、又その冥福を祈るための記念事業として、建武中興六百年目の昭和9年に誕生寺境内に総忠魂碑が建設された。 その折に「建碑会」により編纂された記念誌が「梅花余香」である。

四、「南朝・美作菅家七流と延原家」

平安朝時代、菅原道真の父・菅原是善は、天安二年(858)に備前の国司となり、道真の子孫も又、天和二年(1682)讃岐守となり、子孫も作州地方に土着した。菅原道真から九代目の子孫菅原知頼は美作守に、その子の真兼は押領使に又、その子孫菅原道真から十三代目の菅原満祐(みつすけ)(満佐・満資)は三穂太郎(さんほたろう)(三歩太郎)と称し、奈義地方に実在した人物である。京都まで三歩で歩いて行った。又奈義山に腰を下ろし瀬戸内海で足を洗った・・等々の民話を持つ巨人伝説的人物で、三穂太郎は、博学で京都御所の警護使の役職を務め、領地民達にも善政を行い深く尊敬されていた。

国道 53 号線　県境近くにある神社
門前の三穂太郎の碑

三穂太郎には七人の男子があり、それぞれ居住地の地名を苗字として、美作菅家七流と称した。それは、有元忠勝、広戸、福光、植月、原田、鷹取、江見の美作菅家七流で、城持ちの武士団である。

この中の五人目の子、原田日向守忠門は、久米郡加美村原田にある稲荷山城を居城として美作菅家党の一翼を固めていた。田中康子の実家延原家は、久米郡加美村大字小原(現在の久米郡美咲町小原)に居住し美作菅家稲荷山城主原田家一門の有力な後裔・縁故者一族として、近郷同族と共に原田家を支え続けて来たのである。

延原の姓は原田家の居城である久米郡加美村原田から延びて来た一族だから「延原」になったと伝えられている。

前記の山崎氏の研究により後日判明した事であるが、「南朝美作七忠臣並忠死二十人総忠魂

碑」の詳細が明確になった。

原田佐秀（すけひで）は、菅原満祐（三穂太郎）の七人の男兄弟「美作菅家七流」の五人目原田忠門の子孫である。元弘三年（1333）二月伯耆（ほうき）の国の船上山にて名和長年が隠岐の島から脱出した後醍醐天皇を擁立し、各地の有力武将達に檄を発し参加を求めた。

美作菅家は宗家の有元佐弘を始め一族七流の各武将が呼応し、騎馬武者三百騎を率いて総勢千五百人の勢力で、後醍醐天皇京都帰還を助けた際の原田一党の武将である。時の北条鎌倉幕府を倒して後醍醐天皇中心の建武の新政を樹立した。この京都侵攻の時に、元弘三年の京都・四条猪熊の合戦にて奮戦し、美作菅菅七流の武将の内の有元佐弘、有元佐光、有元佐吉、福光佐長、植月重佐、原田佐秀、鷹取種佐の七武将、騎馬武者二十名、及び多数の手勢が戦死した。

その後、時代は流れ南朝後醍醐天皇を助けた忠臣の評価が見直されて、大正天皇により大正４年11月10日、従四位に有元佐弘、弟の有元佐光、従五位に次弟の有元佐吉が官位の追贈を受け、大正8年11月15日、従五位に植月重佐、鷹取種佐が、続いて大正13年2月11日には従五位に福光佐長、原田佐秀の計七名の各武将がそれぞれ官位を追贈された。これを記念して美作菅家の原田党の後裔・縁故者が、騎馬武者二十名を含め、その名誉を祝し併せて美作菅家七流の多数の忠死者に深く思いを致しその冥福を祈る為に、昭和9年に誕生寺境内に建立したものである。

現在の真庭市落合町の真光寺に有ると云う「贈・従五位原田佐秀の碑」も、同様に美作菅家原田一党の後裔・縁故者が官位追贈を祝し、又その冥福を祈り建立した碑である。

五、ご先祖がお導きの「奇しきご縁」
延原家と井上家

この度、平成24年秋の一日思いがけず山崎氏からのお誘いを受けて先史古代研究会の会員有志達と一緒に車にて、美作菅家と後南朝の関係史跡を探訪した。先ず久米南町の誕生寺にある「南朝美作七忠臣並忠死者二十人総忠魂碑」に詣で延原家と原田佐秀との関係を確認。この時、妻の記憶では誕生寺境内にあると云われている原田佐秀の墓所を探したが素人では確認できなかった。

次に田中康子の実母延原小塩（旧姓井上）の実家井上家の先祖の居在地の赤磐郡吉井町是里物理（もどろい）（現在の赤磐市是里物理）にある「井上氏先祖之碑」に詣で、その碑誌を拝読し井上家先祖の起源について勉強し、この是里物理に居住した経緯の一端を理解することが出来た。

井上氏（うじ）先祖之碑

この時「井上氏先祖之碑」建設者氏名銘板の中に「井上龍太郎」（延原小塩の次弟井上一三（かずみ）の長男）の名前が克明に刻まれているのを発見して、大変に感激し懐かしく感じた。井上龍太郎は田中康子の従兄妹にあたり、ご夫妻から大変なご厚情を戴いた事を、今でも有り難く感じて居る。

この度の探訪にて、延原・井上両家のご先祖に関わる確証的な史実・史料についてはっきりとした認識を持つことが出来て心から嬉しく思っている。

これらの史実により、先ず、延原家は美作菅家

七流の一党原田氏と、きわめて、深い血脈・同族的な繋がりを維持して居たこと。そして、夫々のご先祖達が、皆それぞれの時代にその時の状況に応じて、全身全霊・命懸けで生き抜いてこられ、現代の我々子孫まで 「命・いのち・生き血」を脈々と繋ぎ続けてくださっている事に、唯ただ感銘を受け深く感謝して、心からの合掌を捧げたい一念である

次に、井上一族は、その昔から信濃国に勢力を保持していた一族であり、源平合戦の時に、木曾義仲の軍勢と共に京都に進撃、さらに西国へと転戦して、播磨・備前地方に勢力を得た。その後、主家・浦上宗景一族の家老として宇喜田直家との戦いで天正三年(1575)に居城の天神山城(備前和気)を失い、その後各地を転戦、最後に山深い是里の地に在居した事を知る。これらの事から、時代の波に翻弄されながらも、井上一族はその時代その時を懸命に生き抜いて下さって、今日の我々子孫に至って居る事を心に銘記し重ねて、深い感謝と合掌の一念を心から捧げなければならないと思った。

これら延原家・井上家のご先祖についての確証的な史実を、これほどまで明確に探求できたことは、 偏に「先史古代研究会」の機関紙“きび考”の編集事務局長・山崎泰二氏との奇しきご縁と、山崎氏ご自身の考古学・歴史・民俗学に関する卓越した深い知識と旺盛なる研究心に拠るところが多大である。

それに重ね加えてもう一つ、同じく「先史古代研究会」会員で、“きび考”の編集委員井上秀男氏との、山崎氏を通して戴いた新しいご縁のお蔭であると驚いている。

井上秀男氏も、また山崎氏と同様に考古学・歴史・民族学に関する豊富な知識と積極的な研究心により、地道で永い間、ご先祖・井上氏一族が信州から西国への転進、そして是里居住の由来について、各地の史実を実地調査されて、極めて正確な資料に基づいた研究成果「信濃から西国に下った井上一族」を機関紙“きび考”第5号に発表された。早速、拝読させて戴き、井上氏一族の大変なご苦労を偲び感服し、理解納得させて戴いた。改めてご先祖達への感謝と、井上家の研究成果へ感謝を申し上げるところである。

それから、更に重ねての「奇しきご縁」の話であるが、井上秀男氏と田中康子とは、実に血縁の深い親戚同志である事が判り、お互いに大変に驚いたところである。田中康子の実母・延原小塩(旧姓井上)の実家は、是里の物理(もどろい)にあり、現在は延原小塩の長兄・井上忠雄の三男豊志の奥様・朝子様が健在で実家を護って居られ、平成24年11月「井上氏先祖之碑」参拝の折には、我々一行五人を出迎えて下さり、手作り「栗おこわ」での歓待を戴いた。心温かい「おもてなし」に対して深く感謝して次の探訪地へと向かった。

井上秀男氏の家系が井上家の宗家で、尊父賀弥太氏は地元では著名な郷土史家で「井上家先祖碑」も一族で建立された。

妻康子の母(小塩)の実家は、宝暦五年(1755)に井上七郎右衛門が井上宗家から分家する。屋号を向新屋(むこうしんや)と称して今日まで続く。その後天保八年(1837)頃に向新屋から井上源次郎が分家し、源次郎の子初五郎に至り、忠雄と小塩(こしお)兄妹が生まれ、小塩は延原家に嫁ぐ。田中康子の実母で延原小塩の実家は、忠雄の息子の豊志が継いだが今は亡く、その奥さんが朝子さんで、分家筋を一人で守っている。朝子さんは康子の従兄の嫁になる。若かりし頃が懐かしい。井上本家筋と分家は代を重ねても、一族の結束は固い。(写真参照)

(この項の史実は井上秀男氏の指導を得ました)

朝子さんを囲んで　筆者夫妻と井上氏

六、おわりに

この「延原家」「井上家」先祖の歴史的考察を記述し、改めて深く感銘を受けた事は、現在この世で生を受けて生きている我々には、実に遠い遥かな時代の昔から、それぞれのご先祖達が実在して、その時代・時代の激動に翻弄されながら命懸けで奮闘し、「命・いのち・生き血」を護り続けて来られ、我々子孫にまで繋いで下さって居る事なのです。

そのご先祖達の尊いご努力の恩恵に思いを致して、心から「深い感謝と合掌の一念」を捧げなければならないと思う。この様なご先祖達のご功績とご苦労に思いを馳せる時、これら両家のご先祖達の血統をしっかりと戴いて、この世に生を受けて居る私達末裔は、決して「自分独りで生きて居るのでは無い」と自覚し誇りを持って、自分を粗末にすること無く、「正しく、明るく、強く」生き抜いて行く事が、ご先祖達のご恩に報いる事と思う。

延原家の家系略図

菅原道真→12代省略→満佐→7人の子＝菅家7流家

満佐＝菅家7流家の始祖（通称三穂太郎）

菅家七流内訳

有元忠勝（有本・在本とも称す）、広戸（佐友）、福光（周長）、植月（公興）、原田（忠門）、鷹取（佐利）、江見（資豊）原田日向守忠門が延原家の始祖

田中氏所有の系図等必要な方は事務局まで相談下さい。

平賀元義の足跡と歌碑について

会員　井上秀男

1.平賀元義と先祖平賀氏について

備前国に幕末から維新に至る激動の頃、万葉歌人・国学者として備前・備中・美作地方を放浪して、700首におよぶ万葉調の和歌を作ってのこしている人物がいた。その人は平賀元義である。

和歌は賀茂真淵に私淑する。この平賀元義を世に紹介したのが、明治の短歌改革者の正岡子規である。「血を吐きし　病の床の　つれづれに元義の歌　よめばうれしも」と　詠った。明治34年「平賀元義の歌」の一文を遺した。墨汁一滴のためにそうした正岡子規が居なかったら、平賀元義という歌人は知られることが無かったと言われている。また正岡子規の死後、元義の作品を取り上げて賞揚した歌人の一人に斎藤茂吉がいたことを、忘れてはならない。

平賀元義の略伝については、元義は寛政12年（1800）7月3日母の実家の備中下道郡陶村枝楢（現在、倉敷市玉島陶）百本家に生れる。母の名前は八重、後に代子と改める。代子の父親は百本平兵衛忠之である。

平賀元義は備前岡山藩の中老池田志津摩憲成（食禄 4000 石）の老臣、平尾新兵衛長春（秩禄130石）の長子である平尾新兵衛源長春に、生れて3か月で岡山市富田町の父宅に引き取られ、翌年の享和元年に嫡子となる。幼名を猪之助と称していた。後に丹介、喜左衛門とも称し、実名は直満、義元、直元、長元等を称している。興津長八郎藤原重之の厄介人となるに及んで、興津新吉、長元等とも名乗った。

天保3年（1832）12月元義33才の時に退去を願い出て岡山を去る。本姓の平賀に複して自筆、奥書に平賀左衛門太郎源元義・平賀七蔵源元義と名乗っている。

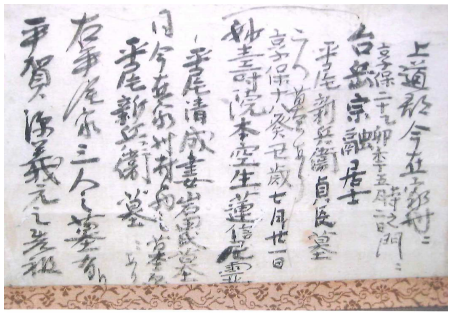
平賀元義の先祖については、慶応元年（1865）

12月の元義自筆の「先祖書上」等によると、姓平賀は信濃国佐久郡平賀村に居住していたので、平賀氏を名乗っていた。

元義から12代祖の平賀大膳大進義種が備前国赤坂郡周匝郷山方村是里（現在は赤磐市是里）字名本村（ほむら）にある山鳥城に在城していたが、後に赤磐郡仁掘東村徳近に出城として徳近城を築いて、当時の守護赤松家ならびに守護代浦上家に任えていた。また元義から11代先祖の平賀左衛門次郎義兼も、最初、是里の山鳥城に居たが後に仁掘東村の平尾の小城に移ったと平賀系図に記されている。

山鳥城は私の実家の庭から南方面に見える本村（ほむら）という集落にある標高 312mの小高い山が山鳥城であり、父から「あの山が山鳥城で万葉歌人の平賀元義の先祖の居城していた場所であると、良く聞かされていた。

私は平賀元義が書いた先祖書と思われる文面資料を所有して居ます。下記の写真です。



筆者所蔵の先祖書

内容は元義から5代祖の平尾新兵衛貞長の没年月日と法名と墓地の場所が記されている。平尾新兵衛貞長享保20年（1735）5月2日没、享年56 才、法名は台岳宗融居士と記され、元義から6代祖の平尾清成の妻、岩田氏の墓として没年享保 18 年（1733）7月21日法名妙壽院本空生蓮信尼霊、平尾新兵衛墓にあり右平尾家三人の墓あり、平賀源義元の先祖と書かれている。

羽生永明著「平賀元義」の平尾家系図を参照して、没年月日、法名を照合した結果、間違いなく書かれています。先祖書の補足として平尾新兵衛貞長の父清成の幼名は猪之介正保3年（1646）に出生し元禄8年（1695）12月22日に没し、今在家の花蔵坊に葬られている。平尾新兵衛清成の妻は岩田市郎衛門の娘である。名前は夏子という。夫清成の没後妙寿院と称して享年86歳で没している。

2.赤磐市の元義の歌碑

赤磐市周匝（すさい）に諏訪神社が鎮座している。この神社近くに周匝公民館があって、その横の場所に平賀元義の歌碑が建っている。

筆者撮影　元義の歌碑

先ず諏訪神社についての縁起、または所伝によると、貞和年間（1345）に平賀三郎信治が、足利将軍より仁堀庄を賜って備前国赤坂郡を支配するに及び、旧赤坂郡吉井町是里の神ノ峯に信濃国から諏訪明神を勧請して、平賀三郎信治から2代目後裔の平賀大膳大進義種に至って山鳥城の東方に社地を造って諏訪明神を祀っていたが、天文21年（1552）に尼子氏に攻められ落城の際に、諏訪明神のご神体を山鳥城の眼下の滝山川へ敵兵が投じたと伝えられている。その後滝山川を下った周匝の小字の小モノ矢田という場所に御神体が漂着しているのを周匝の住人の宇野某（それがし）が発見し、菰（こも）を敷き竹の矢来を作って、生鮎を供えて祀り、その後現在地に社殿を建立して、奉祭してきたのが周匝の諏訪神社の由来である。

明治40年村社に指定、終戦後昭和 27 年宗教法人法により、氏子達によって管理されている。江戸時代には藩老池田家より社領として田高八斗の寄進を受けていた。私も幼い頃、諏訪神社の夏祭りを楽しみにしていた。その頃は盛大で盆踊り相撲大会、夜店が出て地元では「お諏訪祭」

と呼んでいる田舎の夏祭りである。

諏訪明神を祀っていた平賀氏の先祖と子孫の平賀元義の関係から、周匝の諏訪神社の近くに平賀元義の周匝で詠んだ和歌の歌碑が建立されている。左の写真の歌碑には

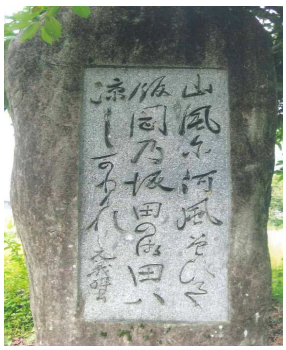
「周匝路の　堤の木の間　わけくれば
天橋立　行く心地せり」

と刻んで、平成元年周寿会と記してある。
この和歌は赤磐市福田地区から吉井川に沿って、周匝橋方面に土手堤があって千本松の松並木と呼ばれていたと昔人から聴いた。

今は、松の木は一本も無いが、元義の居たころには、松並木があったのだろう。私は以前に古い写真で見た記憶がある。

3.矢吹家と楯之舎塾と歌碑について

安政4年（1857）平賀元義 58 歳の時に久米郡柵原町飯岡多門坂田の地に「楯之舎塾」を創設する。



飯岡楯之舎塾の歌碑

この時平賀元義の高弟でもある、旧久米郡柵原町行信の矢吹林太郎田使経正が尽力して、楯之舎塾が創設された。矢吹経正は嘉永元年（1848）8 月 7 日に元義に入門している。楯之舎塾開設当時には、門人が80名ぐらいの人数に達していた。飯岡での門人として田尻脩平・小林数馬・角南泰之助・最上慎助等の名前が見られる。しかしこの楯之舎塾も経費の面で続かなくて安政6年（1859）の正月楯之舎塾を閉鎖して、平賀元義は久米郡柵原町行信に住む門人の矢吹経正の家に移る。平賀元義が安政5年（1858）5 月 13 日に飯岡で詠んだ和歌が歌碑として楯之舎塾跡に建てられている。飯岡の月の輪古墳の見える場所に

「山風に　河風そひて　飯岡の
坂田の御田は　涼しかりけれ」

と詠んだ歌碑である。歌碑には昭和42年 7 月柵原町教育委員会と楯之舎塾に尽力した矢吹林太郎田使経正の曾孫に当たる矢吹修氏が建立したと記されている。この歌碑の裏面には当時岡大教授の藤井駿先生の撰文によって楯之舎塾の由来について記されている。また矢吹修氏は平賀文庫所蔵者として有名である。

矢吹家所有の江戸期初期から大庄屋として世襲のあらゆる文書・記録類を整理され、昭和35年に『近世作南農村資料』巻Ⅰを翌年に巻Ⅱを著書にされ、昭和 48 年には矢吹家蔵の全部の文書・記録類をマイクロフイルムに収めて、岡山県総合文化センターに寄贈され、昭和51年に『矢吹家文書目録』を編集されている。矢吹修氏の著書を所有しているので、今回参考資料として再読しました。

4.矢吹家文書目録と平賀元義文献資料

矢吹家文書目録として、元義の文献資料が長さ 76cm 幅 45cm 高さ 41cm の木箱に保管されている。この文献資料が矢吹家にあるのは、慶応元年（1865）平賀元義没後、長男の源大が久米郡柵原町行信の矢吹家に遺言・遺墨類を委託したうえで、藩士の加藤峰之進の養子になっていたが、故あって離縁して亡命する。その後京阪神方面に20年間放浪して、長浜義則と称して和気郡本荘村衣笠に帰郷して住居している。

その源大（元義の長男）が矢吹家に委託されたものが残っている。

平賀文庫の写真

それらの委託された文献資料を羽生永明氏（1869～1930）＝元義研究家が明治大正にかけて分類・整理されたのが『平賀文庫』として保管されている。

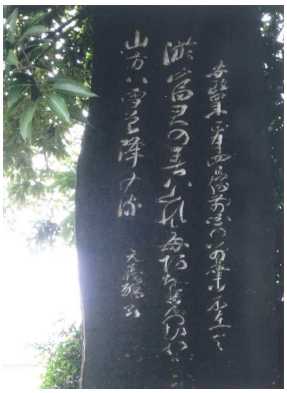
平賀元義の万葉調の歌が明治34年（1901）正岡子規（1869～1902）に認められ、その歌は元義研究家達によって、蒐集せられ、大正14年（1925）には羽生永明著の『注解平賀元義歌集』として出版され、斉藤茂吉・杉鮫太郎共著の『平賀元義歌集』岩波文庫昭和13年6月刊　藤本実編『編注平賀元義歌集』角川文庫昭和34年刊等が出版され、その後杉鮫太郎著『平賀元義の歌』S52年出版、『平賀元義　歌と書』S55年限定500部。

編者としては赤木和彦・大岩徳二・小森一郎・正務弘などによって出版されている。『岡山文庫（231）』の中に『平賀元義を歩く』渡辺秀人・竹内祐宣著平成16年『平賀元義論考』紺屋畯作著S54年などの諸本が出版されている。このように元義研究についての文献資料本があることに気付かされた。

5.宗形神社と元義の歌碑について

宗形神社は赤磐市是里字大宮山3235番地に鎮座している延喜式内の古社であり、大宮山はもと巻ノ宗とも呼ばれている。祭神は多紀理比売命・市杵島比売命・多岐都比売命の三女神である神祇志料に、備前赤坂郡山方上下七ヶ村の氏神と見える。縁起に人皇第10代崇神天皇の御代の鎮座で古くは山方大宮、是里大宮と称されていた。人皇第16代仁徳天皇が吉備国に行幸せられた時に、海部直の女黒姫を慕われて古歌として「山方にまける青菜も吉備人と　ともにし摘めば楽しくある」と詠まれた伝説の地である。

この宗形神社の境内に平賀元義の歌碑を建立しようと、昭和55年10月宗形神社奉賛会なるものを設立し、その事業の一つとして元義の歌碑を建立することが決定して、昭和56年春、石碑建立者・協賛者・地元の多数の参加者が集まって平賀元義歌碑序幕式が開催され、私も故郷であ参加しました。



宗形神社境内の歌碑

歌碑となった元義の和歌は宗形神社の縁起などについてよく知っている元義である。仁徳天皇の古歌に因（ちなん）で詠んだ和歌で、詞書に安政四年（1857）正月四日備前国別業にて、

「大君の　春はくれども　青菜つむ
わが山方は　雪はふりける」

としての和歌を詠んでいる。この和歌を歌碑として建立された次第です。

この歌碑の奉献者として高坂義一氏の尽力を忘れてはならない。高坂氏は和気郡佐伯町北山方の出身で、高坂石彫工芸㈱を設立され、昭和42年業務拡張に伴って茨城県真壁郡間壁町亀熊1848番地へ移られる。昭和44年6月硫黄島戦没者顕彰碑を製作された。

実は高坂義一氏の先祖は、武田信玄の重臣で高坂家中興の祖、高坂弾正昌信でその子孫である。高坂氏は昭和53年8月から私財を投じ、子息

と共に１ヵ年をかけて精魂を込めて高さ8mの平和観音像を制作して、高坂弾正昌信公の菩提寺の信濃長野市松代町豊栄の龍譚山明徳寺に寄進し、寺域の拡張・参道の改修後位置を定めて、奉安し落慶供養をする等功績をつまれた。

その後高坂氏は自分の先祖のルーツを求めて全国の高坂氏についての資料を集めて、各県地方を車で走行され、車2台を乗り潰したと、当時の信濃新聞に報じられたといわれている。その一念が通じて、長野県下伊那郡大鹿村大河原に96代の後醍醐天皇の皇子宗良親王(**編者注＝その子尹良親王の末裔が岡山に雪吉の姓で活躍中**)に仕えた、」南朝の忠臣香坂美作守高宗公が応永14年(1407)3月27日に没し、墳墓があることを知り、香坂高宗公の碑を建設を計画され、四方八方を石材を求める中で、茨城と福島県の県境付近で黒花崗岩を見つけ、その石材を購入して四つ割にし、一つは香坂高宗公の碑を造り、二つ目は宗良親王墳墓のある、静岡県引佐郡引佐町伊谷に運んで宗良親王の肖像と和歌を刻み建立された。

残りの一個が宗形神社に建立された平賀元義の歌碑に使用された石材である。高坂氏が遠路茨城県から岡山県まで自費で運搬され奉献されたのである。“きび考”8号に「宗良親王と南朝の忠臣の動向」と題して寄稿文として居ます。宗良親王と香坂美作守高宗の関係について触れて書いております。

平賀氏は信濃国佐久郡平賀村に居住していたので平賀を名乗った。平賀元義の先祖は信濃国。宗形神社の元義歌碑の奉献者の高坂氏の先祖の香坂美作守高宗も長野県下伊那郡大鹿村大河原に墓石があり先祖は信濃国である。又平賀元義の研究者である羽生永明氏は長野県下伊那郡の出身者で偶然がかさなっている。彼は大正4年『注解　平賀元義歌集』を出版されている。羽生永明氏は故郷の郷土史研究にも尽力され『下伊那郡誌稿』17 冊と『伊那人物私稿』18冊などの資料を残されている。

故郷の宗形神社境内に平賀元義歌碑が建立されてから、34年の年月が流れる。久しぶりに歌碑の前に立って除幕式の当日のことを思い浮かべて、歌碑の写真を数枚写して帰った。飯岡の楯之舎塾の跡地にも足を運んでみた。

碑の横にある木が大きく茂っていた。今から157年前の安政4年(1857)楯之舎塾が開設された当時の門人達は、何を思い何を求めてこの地に足を運んでいたのであろうか。幕末から明治に至る時代の中で、万葉調の歌人として国学者として、備前備中美作の各地の人々と交流をもっての遍歴を通しての、元義66歳の生涯であった。

私の故郷には平賀元義の足跡の地があって今回寄稿文として取り上げてみた。この文面を書くに当たって諸氏の出版された文献資料を参照させてもらいました。

参考文献資料　①『平賀元義』 羽生永明著
②『平賀元義歌と書』
③『平賀元義の歌』 杉鮫太郎著
④『矢吹家文書目録』 矢吹修著
その他本文中に記載しました。

親子二代の著作に接して

『信濃の井上氏』 片山正行著

会員　山崎泰二

この著作に接したのは、歴史仲間の井上秀男氏が「長野井上氏の末裔」であり。数年前に同郷の有志数名で信州の著作者に面談した経緯があって、初刊本を謹呈されたものであった。

今は倉敷児島に住む井上氏は生まれが備前と美作の国境にある、吉井川中流域の周匝の山間部に点在する集落の一つ物理(もどろい)の里

が、彼の生まれ故郷であるが、縁があって私の仲間と探訪したことがある。井上秀男氏のご尊父は地元では知れた郷土史家で集落の長（おさ）で、井上家の本家として昭和 52 年、天神山城落城 400 年を記念して立派な記念碑を建立し、毎春 3 月には先祖祭を催している。

庭には社を祀ってある。（この集落は井上姓の一族のみ）そうした家庭で育った秀男氏も若くして郷土史には造詣が深い。収集の資料も県立博物館の学芸員と遣り取りをするレベルである。

尊父賀弥太氏亡き後、先祖碑の写真と「言われ書き」を数名の井上一族で信州信濃の先祖発祥の地を訪問し（平成 18 年）、当地の教育委員会の紹介で「須高郷土史研究会」を主宰していた片山正行氏との故知を得た。当然歓待を受けたがその紀行文は、先史古代研究会の『“きび考”5号』に掲載された。私は“きび考”の編者をしている関係で、井上氏に贈呈されたこの著作と手紙類を拝見することになった。

井上一族が周匝（＝廻り巡るの意）の山奥である是里に住み着いたのは、戦国時代の赤松とその守護代浦上氏の有力家臣団としての活躍がある。宇喜多直家に破れ逃げ隠れ住んだのが、先に紹介した是里の物理の郷である。

> 井上氏（うじ）は和気郡の天神山城主浦上宗景に仕えていたが天正3年（1575）9月頃に宇喜多直家に攻められ落城する。その後縁を頼って美作国の三星城主の後藤勝基の配下となるが、この三星城も天正7年（1579）に同じく宇喜多直家によって落城する。その後各地を流浪して先に紹介した赤坂郡是里物理の里に居住したことが、『赤坂郡是里村検地帳』に「屋敷方5畝18歩、もどろい二郎右衛門」の名前が載っている。
>
> 井上秀男氏より伝授

信州の井上家は清和源氏を祖に持つ国内屈指の著名な氏族で、詳しくは『信濃の井上氏』を参照されたい。南北朝時代南朝方に付いた一派が吉備井上一族の源流と聴く。

一方長野の片山久志氏は父の正行氏（平成 5 年没）の遺作に接し、父の意思を引き継いで今日の出版にこぎつけた。父正行氏は東大の卒業を待たないで帰郷し、長く教職の傍らで郷土の「須高郷土史研究会」を主宰、『須高』を編纂しながら井上家の研究を続けた。地元の須坂市文化財審議会会長を勤め、教職退職後は小阪神社の宮司をしながら初心を貫き、この遺作を残し。

息子の片山久志氏がいざ出版と思い立ってみると、写真や引用の正確な出所などの確認に奔走し、ついに標題の大作に仕上げた。本文の大半は父の遺作でも、この『信濃の井上氏』なる本は息子の久志氏の労作と言うべきであろう。是非一読を薦める。

私は友人の井上秀男氏と長野の片山久志氏が共に、父親の郷土史愛を引続き、父に劣らぬ活動と成果を成し遂げておられる偉業に敬意を表し、益々の研鑽を期待するものである。

吉備と秦氏（２）

会員　山田良三

前号の吉備と秦氏（１）の続き

一、日本書紀の記述から

『日本書紀］応神天皇二十二年条に、次のような記事が見える（以下の原文は岩波書店刊『日本書紀』による）。

「二十二年の春三月（中略）、天皇、難波に幸（いでま）して大隅宮に居します。（中略）高台（たかどの）に登りまして遠（はろか）に望（みそなは）す。時に、妃兄媛（えひめ）侍り。西を望（おせ）りて大きに歎く。兄媛は、吉備臣の祖御友別（ともわけ）の妹なり。（中略）天皇、兄媛が温情之情（おやおもふこころ）篤きことを愛でて、則ち語りて日はく、『爾（いまし）二親を視ずして既に多（さは）に年を経たり。還りて定省（とぶら）はむと欲ふこと、理（ことわり）灼熱（いやちこ）なり。』とのたまふ。

則ち聴（ゆる）したまふ。よりて淡路の御原の海人（あま）八十人を喚して水手（かこ）として吉備に送す。（中略）天皇、便ち、淡路より転（めぐ）りて、吉備に幸して小豆嶋に遊びたまふ。

（中略）葉田（はだ）の〔葉田・此（これ）をば簸娜（はだ）と云ふ。〕葦守宮（あしもりのみや）に移り居します。時に、御友別参赴（まうけ）り。則ち、その兄弟子孫を以て膳夫（かしはで）として饗奉（みあえつかまつ）る。天皇、是に、御友別が謹惶（かしこま）り侍奉（つかえまつ）る状を看（みそなは）して悦びたまふ情有します。因りて吉備国を割きて、その子等に封（ことよ）さす。（中略）ここを以て、その子孫、今に吉備国に在り。」

以上の要点は次のようなものである。

「応神天皇の妃兄媛は吉備出身であった。天皇が淀川べりの大隅宮に居た時、兄媛が故郷を懐かしく思い、吉備へ帰りたいと言うので許可した。ところが、天皇は兄媛が恋しくなって、吉備に出向き、葉田の葦守宮に逗留した。兄媛の兄の御友別は一族を挙げて天皇を歓待し、帰順の意を表した。天皇は大いに悦び、吉備国を割いて、御友別の一族それぞれに領地を与えた。」

以上は有名な応神天皇が妃の兄媛を訪ねて吉備に来訪した記事である。この時代に吉備国を支配していたのが御友別であり、その中心地が葉田の葦守宮だとしている。

応神天皇はその治世の時代に秦氏の渡来を実現させた天皇であり、秦氏の氏神である宇佐を始めとする八幡宮に祭神として祀られているなど秦氏とは切っても切れない関係をもった天皇である。

郷土の歴史研究家の薬師寺慎一先生はその著作の中で造山古墳は応神天皇の陵ではないかとも比定している。

葉田は波陀とも表記され現在の秦（ハダ）に通ずる。京大の上田正昭教授によると、「古語拾遺」（807 年）に「秦の字を訓みてこれを波陀と謂う」とあり、また「新撰姓氏録」が「姓を波多と賜ひき」とあることから「秦」は「ハタ＝ハダ」の当て字と見るのが妥当とある。

造山古墳が応神陵かということはさておいても、この時代、吉備が極めて強大な勢力を持っていたことは確かで、「ハダ」という地名にからも吉備と秦（ハダ）との関わりの大きさを想定することができる。

また、この日本書記に記される葉田の葦守宮は、現在の岡山市足守であるとみなされているが備前の幡多であるとの説もあり、検証して見たいと思う。

二、吉備地方の地名・史跡に残る「秦」

備地方の各地には秦氏との関わりを伺わせる地名や史跡が数多く存在する。そのいくつかを紹介して行ってみよう。

1)備中の秦氏

○総社市秦(ハダ)とその周辺

吉備地方最古の寺院跡：秦廃寺がある。その礎石の大きさなどから飛鳥時代に創建された日本列島内でも最古の時代の寺院であったと考えられる。更に地域の福谷には鉄産の神を祭る姫社神社がある。ヒメコソは新羅の王子アメノヒボコの妻とされ、秦氏が鉄産の技術をもって渡来したと伝えられることと相まって、この地域の秦氏の関わりが注目される。

最近発見された一丁ぐろ古墳など 4〜6 世紀にかけての遺跡が多く発見されている。他に総社市には服部の地名が残る。服部は秦氏による機織に因む地名と言われる。背後地に祀られる正木山の麻佐岐神社の岩座は秦氏のもつ信仰形態を思わされる。稲荷（伊奈利）は秦氏の氏神だが、巨石を神の憑代とした信仰を持っていた。（稲荷の本社には磐座信仰の対象となった巨岩がある）

○高松稲荷

イナリは秦氏の氏神、竜王山には吉備地方でも最大級の盤座がある。報恩大師が開祖とされている。その伝承には秦氏との関係をうかがわせる内容がある。

○古代祭祀と秦氏との係わり

弥生時代の盤座信仰や古代祭祀に秦氏とのかかわりをうかがわせる内容がある。（佐藤光範氏の研究）総社市秦の正木山　稲荷山竜王山ほか

○鉄産や銅の加工技術などの遺跡

古代「伽耶」は鉄産の集積地だった。吉備の各地に残る鉄産の遺跡や地名に残る「カラ」や「カヤ」の地名との係わりも残っている。

陶器の製造地も同様である。古代鉄産の中心地だったのが半島の伽耶（カラ）、鉄産技術はここからもたらされたと考えられる。吉備にはカヤやカラの地名が多い。半島南部に鉄産技術が伝来したのは南方からのルートの可能性が高い。国東半島からは紀元前 8〜10 世紀の製鉄遺跡が発見されており、半島南部の製鉄は倭国の国東にあったとされる東表国から伝えられたとの説もある。（鹿島昇氏など）

○古代古墳の築造やその他の遺跡との係わり

秦氏が高度な土木技術を有していたことは広く知られているところである。造山古墳など巨大古墳の築造や湛井の堰などの建設には秦氏の持っていた土木技術によるものではと思わされる。

2)備前の秦氏

○岡山市幡多

岡山市中区の幡多地区及び近辺には秦氏に因む多くの遺跡や史跡が残っている。

幡多郷は和名抄にある上道郡幡多郷であり幡多をハタと読み古くからの地名を伝えている。

郷の一部沢田の裏山には金蔵山古墳がある。この古墳からは多くの鉄器が発掘され、その築造時期が半島からの渡来の時期とも一致してこの地域の秦人との関わりが想定できる。

赤田に幡多廃寺跡がある。岡山県下一と言われる巨大な心礎がある。赤田の地名も興味深い。

東に進むと旧瀬戸町から岡山市の境を経て旧長船町福岡に至る地帯は、鉄産の中心地であり更に陶器の製造地が続く。福岡神社がある。福岡神社は児島の熊野神社とも関わりがあり、金属加工の集団との関わりがあると言われている。

津島の半田山は「和気絹」に「秦氏の何某山中に松数十本植えたり。よって秦山という」との記録がある。

「可知」旧上道郡可知郷は秦氏のうち勝部の遺跡と言われる。

「幡多二千年の歩み」(幡多学区連合町内会発行)など参考にさせていただきました。

○備前市香登

現在備前市の香登地区には秦氏との関わりを示す伝承や史跡が多く残されている。秦大兄（はたのおおえ）がこの地の人物であったとの古事が残る。秦大兄は山背大兄の後見人だった秦河勝が山背大兄が蘇我氏によって死に至らしめられた時に難を避けて坂越に逃れたとき、同様に香登の地に逃れて来たと言われている。

町内の大内神社の摂社に大酒神社あり。大酒神社は大避神社とも書かれる。京都の太秦近辺や赤穂の坂越近辺にも見られるが大避はダビデを表すとの説もある。かっては「かがつ」と言われた陶器の産地。背後の熊山は秦氏との係わりが指摘されている。

○熊山遺跡と秦氏との係わり

熊山遺跡には秦氏とのかかわりをうかがわせる遺跡が数多くある。猿田彦神社も秦氏とのかかわりを持つ。熊山と秦氏のかかわりについては岡野進氏の研究が詳しい。

○西大寺観音院

秦皆足が納めた観音像が基との伝承がある。皆足姫は周防の玖珂（現在の山口県東南部）から来たとされるが、玖珂にも秦氏の記録が残っている。所在地の金岡の地名にも秦氏との関わりが伺われる。

○赤穂市坂越

兵庫県になるが赤穂市の坂越には秦川勝を祀る大避神社がある。妙見寺は秦氏の寺といわれ（妙見信仰は秦氏との関連で多く見受けられる）、またここには児島高徳の墓がある。高徳は三石の戦いの後この地にかくまわれ傷を療養したとされる。近隣には秦氏を祀る神社（大避神社）が多い。赤穂を流れる千種川は砂鉄が多く取れたことから、鉄の産業に必要な砂鉄を求めて秦氏がこの地方に来たという説もある。

3)美作の秦氏

美作の各地にも秦氏に関する多くの史蹟や記録が残っている。

○久米郡美咲町錦織

秦氏による桑の栽培と養蚕、絹織物の生産地だった。近隣の久米南町は秦氏の出自と伝えられる法然上人の誕生地であり、鉄山地でもあった。孝子として秦豊永の記録が残っている。美咲町には本山寺に近く波多神社がある。両山寺は白山信仰の開祖と言われる秦氏の僧泰澄が開基とされる。那岐町の菩提寺は幼少の法然上人が修行したと伝えられるが秦氏の君と言われた母親の弟が住職だったと言われている。

4)児島の秦氏

○倉敷市児島　郷内(林ほか)近辺

熊野神社がある。役行者の弟子が訪れて熊野山を開く、現在は修験道の総本山五流尊流院と熊野神社が併存する。後鳥羽上皇の皇子が開祖となり、児島高徳はこの地の出生と伝えられる。元は旧福岡村と言われ、福岡神社があり、陶器の産地でもあった。三角神獣鏡が発見され銅産の地の可能性が大きい。ハタと呼ばれた地域があった。

○由加(瑜伽)山

由加山も古来岩座信仰の地であり、稲荷を祀っている。また妙見山があり妙見宮を祀っている。本殿の背後地は岩座であり古来イナリを信仰してきたことが伝承などに見ることができる。熊野社を祀る福岡（児島）と一体でもあり秦氏の信仰地であったことはほぼ間

違いない。由加山は江戸時代讃岐の金比羅宮との両参りが盛んだったが讃岐及び金比羅も秦氏との関わりの強い所である。

私は澤田沙葉師とこの地を訪問したが、その時宮司に岩座を案内してもらった。澤田師は秦氏＝景教徒でありそれがまさにイナリ、伊奈利～奈の字はもともと木の下に示すと書く～→稲荷）であると言われていた。

三、秦氏と岡山の人物

１)秦姓の人物

岡山歴史人物事典には何名かの秦姓の人物が紹介されているがその中のうち主なものは次のふたりの人物です。

秦大兄　香登の人物　朱儒　白鳳時代の技能者　698 年（文武２）４月香登臣を賜姓された（続日本紀）。このとき備前国の侏儒とある。

秦豊永　平安時代の孝子。若年から父母に孝養をつくし、父母の死後もよく父母の墳墓を守った。865 年（貞観７）11 月位を三階級特進され、課役を免除された（三代実録）。久米郡錦織（現美咲町）に錦織神社あり、秦氏と関係が深い。

２)秦氏及び秦氏とかかわりがあったとされる人物

○和気清麻呂　熊山をめぐる秦氏との係わり

宇佐八幡神託事件と秦氏との関わり

宇佐、大隅に流されるがいずれも秦氏と関わりの深い地であった。

和気清麻呂が大隅に流される途上３００頭の猪がその身を守ったとされるが、この猪とは秦氏のことではないかと言われている。和気氏を祀る神社に狛犬の代わりに猪が祀られている所以である。

平安京造営をめぐる秦氏との係わり、平安京は和気清麻呂の進言と指揮の下、秦氏の協力で建設された。和気清麻呂を祀る神護寺はもともと秦氏の修行地であった。

○法然　山田繁夫氏著「法然と秦氏」に詳しい

二流れの幡

父漆間氏は辛島氏（宇佐神官家）の流れ（美作立石家と同族）である。辛島とは嶋（倭国、日本）における韓（秦）の意味である。

母秦氏の君は秦氏の長者の娘であった。

法然が幼い頃修行した菩提寺は母秦氏君の弟が住職だった。久米南の地域と秦氏の係わり錦織神社と両山寺：錦織神社のある旧錦織村には秦氏の長者屋敷があったと伝えられる。また歴史人物にも記録のある秦豊永の伝承がこの村にある。また錦織神社とは両山寺とつながっているが両山寺の開基は白山権現の開祖秦氏の同属泰澄（たいちょう）である。

また法然上人の両親が子授けを祈願して参篭したと言われる本山寺近くには波多神社があり、金比羅山もあり、製鉄跡の存在など秦氏の関わりの大きい地域である。

・熊野社と法然

法然の出家後実家の漆間家が熊野社に所領を捧げたという記録が残ってい。

遊学中の秦氏との係わり＝法然の南都遊学時にこれを支援したのが洛西の秦氏であっのではと山田繁夫氏は推察している。

・聖集団と法然＝聖集団とは公的な寺院に属さない僧侶の集団である。これも秦氏と関わりが深いと見られている。

○児島高徳

誕生の地とされる児島熊野社、所在地とされる豊原郷、出兵の地熊山、傷の治癒のため滞在したとされ、高徳を祀る碑も残る坂越等関係する各地は秦氏の伝承の色濃く

残る地域である。

〇宇喜多一族　　先祖は百済王家か
新羅王子天日矛か？

宇喜多の先祖は百済の王家とも新羅王子天之日矛とも言われる。いずれにしても半島からの渡来の末裔であるということである。

〇宇喜多の別姓は「秦」

香川県観音寺市八幡町の四国霊場札所、神恵院（じんねいん）・観音寺（羽原恭道住職）に収蔵されている史料「弘化録」 に宇喜多の別姓は「秦」との記述がある。（このことは先史古代研究会会長の丸谷憲二氏より）

〇宇喜多騒動

キリシタンとの係わりが騒動のもとと言われている。香登地区には「鼻塚」という祠がある。これは秀家の旗持ちだった六助が戦勝の証として持ち帰った敵兵（朝鮮兵）の鼻を「敵兵といえども国のために殉じた人々ならば」との趣旨で秀家公から貰い受けた鼻を供養したのが始まりだと伝えられている。この香登地区は秦大兄の伝承があり、また江戸期は隠れキリシタンの伝承がある。

香登地区の歴史を研究した浜田先生に石に刻まれた十字架などの遺跡を見せていただいたことがある。秦氏が景教徒であったとすれば、その教えに近かったキリシタンにその多くが改宗していたことが頷けられる。宇喜多一族が秦氏であるか、そうでなくても秦氏と深い関わりがあったことは否定しがたい。

四、秦氏と吉備との関わりを考える

秦氏に関わる様々な伝承、その中でも吉備の国に残る伝承や遺跡を見ると。秦氏の渡来の主力地が吉備であったのではと思わされる。

薬師寺真一先生は波陀の葦守宮と応神天皇との関連から、造山古墳が応神天皇の稜ではないかという説を掲げられているが、応神天皇と秦氏との関わりを考えると十分考えられる説である。

最近岡将男さんが「吉備邪馬台国東遷説」という本を出版されたが、この中でも倭国の古代国家形成に吉備が深く関わっていた事実を克明に挙げておられる。

弓月の君が 127 県の民を率いて玄界灘を渡って来た。それでは弓月の君はどこに上陸したのであろうか。赤穂の坂越であるとも言われている。坂越といえば秦氏の族長の秦川勝が蘇我氏の難を逃れて来た地だとされているが、香登に住んだと言われる秦大兄も同じ時に蘇我氏の難を逃れて香登に来たと香登の歴史研究家浜田先生から耳にした。

秦氏渡来の時代に倭国のなかで最も巨大な古墳である造山古墳が作られた事、吉備の各地に残る秦氏の遺跡の多さを考えるとここ吉備こそが秦氏渡来の中心地であったと考えるのが自然であろう。勿論山背や関東の秦野、信州、尾張、伊予や讃岐、周防など各地に秦氏の史跡や伝承が残っている。しかし吉備こそが秦氏渡来の中心地というのが私の率直な実感である。

先般発見された総社市秦の一丁ぐろ古墳、全長７０メートルの前方後方墳である。造山古墳などの前方後円墳の造られれる少し前の時代である。私も数度訪問させていただいたが、その時代からすれば極めて大きな古墳である。ここに登れば眼下に吉備の平原を見渡すことができる、さらに後方の背後地は正木山である。

池田家が備前に封じられて岡山藩主となって最も崇拝されたのが備前一宮石上布都魂神社（現赤磐市）である。この神社は素須佐男命が八岐大蛇を退治した剣が納められたとされ、石上の名のとおり物部氏の神社である。

＜参考＞

日本書紀一書に、「其の蛇を断りし剣 をば、號けて蛇之麁正（おろちのあらまさ）と日ふ。此は今石上に在

す」また一書に「素盞嗚尊、蛇の韓鋤（からさひ）の劒を以て、頭を斬り腹を斬る、（中略）其の素盞嗚尊の、蛇を断りたまへる劒は、今吉備の神部の 許に在り。」

宮司の物部さんに聞くと、須佐男命の王子であるニギハヤヒ命は吉備から東方に向かい但馬方面を経由して大和に登ったとされる。

そう考えると古代の吉備は出雲から来た須佐男～ニギハヤヒの物部一族が支配していたとも考えられる。一方物部氏とその後対立した蘇我氏は応神天皇の母君である神功皇后に仕えた竹内宿禰の末裔とされる。蘇我物部両家は対立し戦ったようにも見られるが実は緊密な姻戚関係がうかがわれる。

吉備から播磨、摂津にかけて須佐男命を祀る神社が数多く見受けられる。この地域の支配者は物部一族であったと想像出来る。とすると吉備は物部と秦氏が連携して繁栄を築いた地ではないかと、私は考える。

須佐男命が八岐大蛇を切った剣はいくつかの呼び名があるがその一つがカラサビの剣である。カラとは韓のことである。当時、半島南部のカラ（加羅とも伽耶とも言われる）東アジアでも有名な鉄産の中心地であった。須佐男の一族とカラとの関係もうかがわれる。

カラというと辛とも書く。九州宇佐の八幡宮の神官家は辛島、宇佐、大神の三氏であった。

宇佐神宮は応神天皇と神功皇后と比売神を祀るが八幡がヤハタと読むように秦氏と密接な関係がある。九州鹿児島の鹿児島神宮は本八幡と呼ばれるが、ここ薩摩、大隅も秦氏と密接な関係のある地である。

京都駅からも見える五重塔は弘法大師の開いた東寺であるが、ここの鎮守は八幡様とお稲荷様である。弘法大師は讃岐の佐伯氏の出自であるが、その師の勤操が秦氏の僧侶であったように秦氏と密接な関係を持っていた。讃岐も秦氏が数多く居住した地である。

吉備が渡来した秦氏を最も多く受け入れた地域の、一つであったことは間違いない。

白村江のあと築造されたと言われる。鬼ノ城の築城技術なども大変なものである。

その後の吉備諸国からは数多くの宗教的指導者を輩出している。法然上人の出自が秦氏であることは明らかであるが、その他の宗教人の輩出の背景にも秦氏の歴史が存在していることは想像に難くない。

先に挙げた澤田沙葉師は第八代目の唯一神道の継承者であり、キリスト教民主同盟の日本の代表を務めるカソリックの信者であると同時に日本のモスレム協会（イスラーム）の代表も勤められた、日本古来の古神道を極め、旧新約聖書に加えコーランも原文で読破された超宗派の宗教家であった。

この澤田師が岡山を来訪した時に高松稲荷と由加山に同行した。この時に秦氏と稲荷、それに弥勒信仰の伝来、吉備の中山の意義など話を伺った。この時に「稲荷は秦氏の氏神様」と聞いた一言が私が秦氏に深く関心を持つようになったきっかけである。

澤田師はその著『日本発イスラームが世界を救う』の中で「景教と稲荷、秦氏の奇（く）しびな関係」という項目で、秦氏と景教について書いている。景教というと佐伯好郎博士による研究が有名で、一般に景教はネストリウス派キリスト教と理解されているが、これには少し理解違いがあるという。

ニケアの宗教会議に敗北したネストリウスは、東方教会に逃れてくるが、この東方教会は単純に今のようなキリスト教ではなく、コーランの影響を強く受けた教団だった。

秦氏がその信仰として持ち込んだ景教が伊

奈利であり、同時にそれは仏教的には弥勒信仰として融合していったものであった。

日猶同祖やネストリウス派キリスト教という言葉を聞くと、どうしても今日のユダヤ人やイスラエまたキリスト教を想像してしまうが、源流としては同じだとしても、その形態、儀式、内容についてユダヤ教やキリスト教と違っていたと理解しないと、秦氏の宗教は解らない。

最澄、空海～法然をはじめとした鎌倉仏教など秦氏と日本の宗教理念の関連性が明確に見えてくるようにも思う。今後の検証のテーマである。

おわりに

日本の宗教や殖産に深く係わり、日本の産業や精神文化に多大な影響を与えてきたのが秦氏である。我々の郷土吉備は秦氏とのかかわりが実に深いところである。数多くの著名な人士を輩出した吉備の風土の形成に秦氏が深く係わってきたことがわかる。

今日世界から日本の文化が注目され、とりわけ日本人のもつ道徳性や倫理性が高く評価されている。日本人の良き精神伝統の形成に、主要な役割を担った人達のうち、かなりの部分が秦氏によって、もたらされたと見るのが私の見方である。

もとより日本人は多様な文化と血筋を持った人々の集合体でもある。それらが「和の精神」でもって融合しながら、独特の日本文化を形成してきたのであろう。その中で最も大きな影響を及ぼしたのが、最大渡来人である秦氏であったことは、歴史が事実として証明している。

今日の世界はそれぞれの国が様々な問題を抱えながら、それでも未来に希望を持って、より平和で幸福な文化を持った世界を希求している。そういう今後の世界の展望に日本人の果たす役割への期待が大きい。

日本という国家の草創期に「秦氏」という当時としては極めて多数の渡来氏族がやって来て、殖産技術や精神文化の向上において、新しい国家建設に寄与した貢献度は極めて大きかった。全国各地にその遺跡や記録が残っているが、我が郷土吉備国に残された史跡も数多くあり、その貢献の歴史を感じることができる。今は誰が秦氏の子孫か、一部の秦姓を名乗っている方々を除けば、解らなくなっている。しかし残された遺跡や記録の数々を見れば、間違いなく我々の先祖がその一族の一端であったことは間違いない。

我々はその先祖から受け継いだ良き伝統の文化を、これからは世界の為に役立てる時が来ていると考えることが、われわれの郷土や国の未来、我々自身の未来への希望に繋がって行くように思う。

この文章は 2012 年 7 月 20 日に、岡山県立図書館で「秦氏と岡山の人物」（主催：岡山人物銘々伝を語る会）及び 2013 年 5 月 19 日に総社市秦の「秦歴史遺産保存協議会」の総会で講演した資料を加筆修正した。

連載＝四国八十八ヵ所めぐり

「歩き遍路の旅」８

会員　樋口俊介

修業の道場（土佐の国）その４

24 番（最御崎寺）～39 番（延光寺）」合計 16 ヶ寺（高知県）

海を眺め、空を仰ぎ、ひたすら前へ室戸・足摺の２つの岬を廻り、16 札所を巡拝する。歩き遍路には遥かな道のりの修行の道場だ

23 番札所（薬王寺）に参拝したあとは、おおよそ 80km かなたの室戸岬へと遍路の道をたどることになる。

当日に歩くお寺に関する由来とか伝説等の内容を分かる範囲で説明をします。必ず最後まで歩き通します。

第25回

平第成22年6月14日（月）七子峠越え（久礼～窪川）

歩き（ウォーギング）遍路　札所0ヶ所　約18km

筆者紀行

4時50分に起床し近くのローソンで友達の車に乗せてもらい林原に6時20分に着き、 バスに乗り林原では6名で6時41分に発車し、途中で6名乗車し倉敷で21名乗り合計で参加者が33名で倉敷を7時30分に出る早島から瀬戸中央道に乗り、豊浜SAで休憩し前回歩き終えた久礼に10時20分に到着する。少し前にかわうそでトイレ休憩する。

10時35分から歩き出すも、しばらくは平坦な道だが道路の高架工事の近くから階段を93段下がり、今度は七子峠へ行く道で階段を上がるが、なんと432段（途中の展望台に上がる含む）もあり、全体の階段の総数は486段（下り93段、上り393段）大変でした。その後も急な上り坂、下り坂や細い道を歩き七子峠近くに着く、そこからバスで仁井田まで行き昼食をする。

七子峠へ行く

バスで再度七子峠近くまで帰り、歩き始めは14時30分から山の中の遍路道へ、日頃からの管理や整備が大変です。

人の手が入らなければ、すぐに荒れてしまう。私たちが迷うことなく歩けるのも、「遍路道を残そう」という多くの方々の努力があるからこそ。感謝です！影野を通り米所の仁井田と静かな田園、山なみ木々の新鮮な風を受け美味しい空気を吸い気分は爽快、歩く事は素晴らしいと感じる瞬間です。

七子峠に着く

美味しいお米の郷

途中で休憩を3回とり今日の目的地の窪川に17時02分に到着し、バスに乗り帰路岡山へ17時10に出発して、早島ICで下り、我が家には22時20分に帰宅。

今日も無事で帰れて有難う！身体のあちこちが痛いが気分の方は爽快です。ありがとう！皆さん感謝！家族に感謝！身体に感謝！なお本日の歩数は29．540歩でした。

第26回

平第成22年7月12日（月）ローカル線に沿って歩く（道の駅あぐり窪川～伊与喜）

歩き（ウォーギング）遍路　札所1ヶ所　約20km

37番（藤井山）岩本寺

所在地＝高知県高岡郡四万十町茂串町３－13

電　話＝（0880）－22－0376

宗派＝真言宗智山派
開基＝行基
本尊＝不動明王ほか

○行基の開基。後に弘法大師が訪れてさらに五か寺を建立し、五体の本尊像を刻んだ。今では一寺が残り不動明王の他、観世音菩薩・阿弥陀如来・薬師如来・地蔵菩薩の本尊を祭る。
◎不動明王について
　炎を背負い右手に剣を持ち、怒りの形相で悪をこらしめる。仏道を全うして煩悩をもうち砕く。大日如来の使者である。

筆者紀行
　友達の車に乗せてもらい林原に6時20分に着き、バスに乗り換え6時43分に発車して倉敷により、18名の参加者を含め合計で24名と少なく中型者（25人乗り）でした。
　豊浜SA，須崎東ICで下りて前回歩き終えた窪川には10時58分に到着し、準備などを整え11時15分から歩き出し、「横浪黒潮ライン」沿いに、土佐勤王党・盟主の武市半平太像が、太平洋に向かって立っていた。

37 番岩本寺　　**円形のお堂**

　武市半平太は坂本龍馬と親戚で、龍馬とともに幕末に活躍した人。約1時間くらいで37番岩本寺に着く、入口に和菓子屋さんがあり「三度栗」という名の栗の形をしたお菓子が陳列されていた。この銘菓「三度栗」は、岩本寺の七不思議「三度栗伝説」にちなんで作られたそうです。その伝説とは岩本寺にある栗の木が関係しているようで、今も境内にあります。なお伝説の内容はお楽しみに！本堂の天井に575枚の絵がはめ込まれていて、その中にはマリリン・モンローの絵もあり十分に楽しませてもらった。また境内には丸い円形のお堂があり中には2体の歓喜天が、祀られている。なお本尊はなんと5体もあり、60年に1度のご開帳の秘仏。

38 番へと歩く　　**峰ノ上へ歩く**

　36番から約55kmの道のりを歩いて来た、お寺（37番岩本寺）で、3回にかけて漸く辿り着いたお寺だ！本堂、大師堂にお参りし皆で心を込めて大きな声で読経をする。
　あと歩いて四万十の水車屋（大少の水車が多数あり）で、昼食を（12時20分～13時15分）、特にうどんが美味しかったです。　13時20分から歩き拳の川を通り今日の目的地の伊与喜まで途中で4回くらい休憩する。
　女性の方が犬に噛まれる災難があり、すぐに病院に行き診察して貰う、傷跡も少しで特に支障なく17時20分に到着する。バスで帰路へ須崎東ICに入り児島インター、早　島ICで下りて倉敷に21時20分に着き林原に22時05分に到着する。
　我が家には22時50分に帰宅できた。疲れは有るが何かしら達成感が勝り気分爽快である。今日も無事で帰れて有難う！
　みなさんに感謝！家族に感謝！身体に感謝！　次も頑張るぞ！！
　なお本日の歩数は32．053歩でした。

<u>第27回</u>
<u>平第成22年9月13日（月）遥かなる足摺をめざして（伊与喜～土佐入野）</u>
　歩き（ウォーギング）遍路　　札所0ヶ所
　約20km

筆者紀行

近くのローソンから友達の車に乗せてもらい、山幸駐車場に6時45分に着き7時05分発のバスに乗り倉敷経由で早島ICに入り瀬戸中央道、児島インターで2名乗り本日の参加者は合計31名で出発し途中の「ゆういんぐ四万十」で休憩を取り、前回歩き終えた伊与喜には11時12分に到着する。

準備等を済ませ11時20分から歩き出す、しばらくして遍路道に入り山を登り熊井峠を越しそよ風を受け美味しい空気を吸い、気分は快調で佐賀まで歩き近くの庄寿庵で昼食するがカツオのタタキやツクダ煮等、美味しく満足でした。

熊井峠へと上る

昼食をした店

13時10分から再度歩き出すも足摺を目指して白浜、井ノ岬を通り歩けども歩けども同じ様な風景（太平洋の土佐湾）に沿って海岸線を歩き、気温も33度と高く暑いし汗は出る、足には豆ができ膝も痛く限界に近くなるが気を引き締め、上川口を通り過ぎ今日の目的地の土佐入野まで頑張る。16時20分に到着しバスに乗り一路岡山へ。

早島インターで下り倉敷を経由して、我が家に22時05分に帰宅する。

今日も無事に帰れて感謝！ありがとう！

なお本日の歩数は25．809歩でした。

第28回

平成22年10月18日（月）～10月19日（火）清流四万十を渡り大岐海岸へ（土佐入野～以布利）

歩き（ウォーキング）遍路　札所0ヵ所　1泊2日　約37km

筆者紀行

○一日目は道の駅ビオスおおがた（昼食）から伊豆田トンネルまでの約18km

山幸に6時45分に着き、7時05分発のバスに乗り早島ICに上り児島インターで2名乗り参加者は合計25名で出発し、須崎東ICで下り前回歩き終えた道の駅ビオスおおがたに11時40分に到着、すぐに昼食を済ませて少し休養のあとは準備を整え12時20分から歩き始める。

しばらくして絶景の松並木（約2km）の中を抜けて砂浜（美しい大岐の浜海岸）歩く（約1.2km）左側には白く美しい激しい波、高い波、そこで5、6人の若者がサーフインしている近くを通るが、彼らは夢中に自然の中での雄大で楽しみを満喫している様でした。

足摺を目指し海岸線を歩く

途中で時々遍路道に入るが気分が安らぎ、新たな気持ちが芽生える。国道56号等を歩き四万十大橋（清流）を渡るが、橋の途中で偶然に遊覧船2艇が優雅に進んでいる情景を真下に見て長閑に安らぎを感じ、やがて伊豆田トンネル（1620m）に入り、歩道が狭く少し暗い中で約25分間かけてやっと抜けたが、白い砂浜が美しい大岐の海岸に出て気分が晴れやかに生き返ったようでした。

四万十大橋を渡る

四万十川での遊覧船

本日の目標地には17時06分に到着し、バスで宿泊予定のロイヤル四万十に向け発車して17時30分に着き、早速にお風呂に入らせて頂き疲れを充分に癒す。夕食のあとは皆さんとくつろぎ気分和やかに雑談し22時頃には睡眠する。明日も頑張るぞ

なお本日の歩数は28．331歩でした。

○2日目は前日歩き終えた伊豆田トンネルから以布利までの約19km

4時50分に起床し朝食はバイキング（6時05分～6時40分）を済ませ、バスでホテルを7時05分に出発して前日歩き終えた伊豆田トンネル近くに7時26分に到着する。

大岐の美しい海岸　　アカウミガメの産卵場所

7時31分から歩き始め大岐の美しい海岸沿いにしばし海を眺めて久百々を通り繁華街の国道56号、321号線等の歩道を歩くが交通量が多く大変に危険であった。途中に休憩を3回くらい取り本日の目的地の以布利に12時01分に到着する。約19kmを歩き終えた。バスで土佐清水まで行き昼食（カツオのたたき）をする。

再度以布利に戻り帰路岡山へと須崎東ICに上がり豊浜SAで休憩して、山幸には18時50分に到着する、我が家には20時05分に帰宅する。

なお本日の歩数は28．594歩でした。

今日も無事で帰れてありがとう！皆さんに感謝！家族に感謝！身体に感謝！

合計約37kmで56．925歩でした。「1日目28．331歩」「2日目28594歩」

第29回

平成22年11月01日（月）～11月02日（火）足摺岬を歩く（以布利～三原村）

歩き（ウォーキング）遍路　札所1ヵ所　1泊2日　約33km

38番（さださん）金剛福寺

所在地＝高知県土佐清水市足摺岬 214－1
電　話＝（0880）－88－0038

宗派＝真言宗豊山派
開基＝弘法大師
本尊＝三面千手観音菩薩

○嵯峨天皇の勅願により開基した。本尊は三面千手観音菩薩、脇仏は、不動明王と毘沙門天。もっとも観音の住まう楽園に近い場所として、ここを霊場とし、みずから本尊を刻んだ。

◎千手観音菩薩について

千手千眼観自在菩薩というのが正式な名前で、それぞれの手に眼を持つ。さまざまな持ち物を手にし世界の衆生を救済する。

筆者紀行

○一日目は以布利から38番金剛福寺までの約16km

4時50分に起床し友達の車に乗せてもらい山幸の駐車場に6時40分に着き7時05分発のバスに乗り倉敷を経由し当日の参加者35名で先達さんは坂出で乗車する。豊浜SAで休憩を挟んで須崎東ICで下り、バス内にて昼食の弁当を（11時～11時30分）食べ、前回歩き終えた以布利に、12時35分に到着し準備等を済ませ12時45分から歩き始める。

ひたすら海を眺め心地よい潮風を受け歩き続けるが疲れもピークに達する、しかしすれ違う人々の励ましの言葉等や自然の環境の良さ等を享受し疲れを忘れ元気を取り戻す、それでも途中で休憩を2回して、やっとの事で16時25分に38番金剛福寺に到着する。

足摺岬は四国最南端の有名観光スポットでもあり、インドの観音様が住む山という「補陀洛山」に、最も近い場所と言われているそうだ。そのため、金剛福寺は、まさに補陀洛山を表しているかのような造りになっていた。池や岩が上品に配置されている広大な境内には、数々のお堂が建ち並び、その広さと豪華さには非常に感動した。

38 番金剛福寺入り口　　金剛福寺

本堂、大師堂にお参りをして、大きな声で気持ちを込めて読経をみんなで唱える。

16時50分から先達さんの案内で弘法大師七不思議や白山洞門等の見学をして17時20分バスでホテルへ、早速にお風呂に入り疲れを癒し夕食を済ませ皆さんと楽しい雑談を、22時50分に睡眠する。

なお本日の歩数は24．687歩でした。

○2日目は下ノ加江(ドライブイン水車)から三原村いこいの森までの約17km

5時20分に起床し6時15分に朝食を済ませ、ホテルをバスで7時28分に出発し前日に歩き終えた所へ、下ノ加江(ドライブン水車)から歩き始め一部の遍路道での峠を越し、県道27号線の宮ノ川を通り三原村いこいの森に、休憩を取り本日の目的地には4時間くらい歩き12時30分頃に着く。

此れから先はまだまだ「修行の道場」の最後の39番に向け苦難の連続だと思うが、修行の精神を忘れず自分の気持ちを引き締め、必ず最後まで歩き通します。

三原村いこいの森へ　　39 番延光寺へ歩く

バスで四万十に行き昼食をする。再度歩き終えた場所に帰路岡山へ須崎東ICに上がり早島ICで下り、山幸に19時25分に友達の車に便乗して20時30分に我が家に帰宅する。今回も無事で帰れて有難う！！皆さんに感謝！家族に感謝！身体に感謝！

なお本日の歩数は25．631歩でした。

合計約33kmで50．318歩でした。「1日目24．687歩」「2日目25．631歩」

第30回

平成22年12月6日(月)～12月7日(火)再び山へ向かう県境越え(三原村～一本松)

歩き(ウォーキング)遍路　札所1ヵ所

1泊2日　約28km

39番(赤亀山)延光寺

所在地＝高知県宿毛市平田町中山390

電　話＝(0880)－66－0225

宗派＝真言宗智山派
開基＝行基
本尊＝薬師如来

○「修行の道場」といわれる土佐の札所めぐり、最後の寺。亀が鐘を背負ってきたという伝説は、山号の由来にもなっている。本尊の薬師如来は、聖武天皇の勅願によって行基が刻んだもの。

◎薬師如来について

人間の病苦を癒し心の苦悩、厄を取り除くなど12の誓願をあらわす如来で、四国霊場にはいちばん多く祀られている。

筆者紀行

○一日目は星ヶ浦へんろ小屋から39番延光寺までの約17km

6時45分に山幸の駐車場に着き7時01分発のバスに乗り倉敷を経由し、参加者39名で坂出インターでは先達さんを乗せ須崎東ICで、下り前回歩き終えた星ヶ浦へんろ小屋と走り、昼食はバス内で11時30分頃に弁当を食べ、12 時 25 分に到着する。

12 時 35 分から歩き出し暫くして約5kmくらい遍路道を歩くが、身体に優しく気持ちよく歩けて全く疲れを感じさせない環境で、これぞ歩きの醍醐味と思える一瞬です。それと比較して国道、県道等のアスファルトを歩く時の疲れの度合いが明らかに違う様です。

39 番へ行く途中　　**39 番延光寺**

平田を通りやっとの事で「修行の道場」の最後の39番延光寺に到着する。早速に本堂、大師堂にお参りを済ませ参加者全員で大きな声で心を込めて読経する。境内の池に棲んでいた赤亀が、竜宮から鐘を背負って来たという伝説がある。その鐘は、国の重要文化財。そのため境内には、その伝説にちなんだ背中に鐘が乗っている亀の像がある。

また眼病に御利益があると伝えられる「目洗い井戸」（宝医水）が本堂横にある。そして境内には「新西国霊場本尊奉安所」と書かれた立看板があり、前掛けの石像が横一列に並べられ、かなりの数があり圧倒された。

少し見学の後に本日の目的地の宿毛手前まで歩き、あとバスで（宿毛）秋沢ホテルへ17時25分に到着する。すぐに風呂に入るもぬるく（温度が低い）寒いために直ちに上がり睡眠するも、寝られず大変に困りました。**なお本日の歩数は29．389歩でした。**

○2日目は宿毛手前から一本松まで約16km

5時20分に起床しバスでホテルを7時25分に出発し、前日に歩き終えた宿毛手前まで、準備を整え歩き始めるも本日は遍路道での松尾峠を越える（海抜350m）上り下りもあるが前日のアスファルトを歩くのと違い、疲れは少なく気分爽快に足取りも軽く一本松に向け歩く11時10分頃に切り上げ。

あとバスで愛南町まで行き昼食（11時20分～11時55分）を済ませて再度バスで歩き終えた所へ、そこから（12時05分）一本松へ向け歩くが、遍路道は毎度ながら足に優しく自然環境に恵まれ疲れを感じさせない様な気がします。

松尾坂についての説明　　**松尾峠の境界**

本日の目標地には13時10分に到着し、バスに乗り一路岡山へ倉敷を経由し、我が家には19時40分に帰宅する。

本日は約16kmを5時間30分くらい（山道で上り下りが多く）で歩く。

本日も無事で帰れて有難う！皆さんに感謝！家族に感謝！身体に感謝！

なお本日の歩数は24．913歩でした。

合計約33kmで54．302歩でした。「1日目29．389歩」「2日目24．913歩」

※今日で第二部の「修行の道場」土佐の国24番～39番（16ヶ寺）が終わり、次は伊予の国へ歩き続けます。どうぞ宜しくお願いします。まだまだ続きます！！

素人のざれごと（戯れ言）

『日本語で生きよう！』（１）

Ｑ＝女子中学生の素朴な好奇心
「日本語のことをもう一歩知りたい」

Ａ＝古稀老人の願い
「日本の魅力を日本語で学ぼう」

はじめに

新聞の見開き一杯に「あなたは何語で生きますか」との意見広告が載っていた。私は古稀（こき＝70 才）を過ぎる今日まで、日本で生まれ日本語を話し、拙（つたな）い文章も残してきた。と当たり前の感覚で「日本語」と口にして腑（ふ）と考えさせられた。「私は日本語を本当に知っているのだろうか？」と自問。そんな迷いの抜けきらないまま、仕事に就いた。事務員さんとのさりげない会話のなかで、気になる朝の新聞の「あなたは何語で生きますか」を話題にしていた。真面目に聴いてくれていた彼女も「実は私も・・・・・・・」と反応し「中学生の娘や小学生の息子に何かと問われて・・・・・・」「今の話を子供たちに聞かせたいので、文章にまとめてくれませんか」とのことです。少しでも役に立てればと、「日本語について」浅学ながら、まとめてみることにした。

もとより私はその道の高等教育を受けた身でもなく、人生の大半は電気系防災技術者として生きて来て、還暦を迎える頃から元々興味のあった「歴史系」と「環境問題」に、素人の立場で係わっている。

歴史系の仲間と探訪中に「現代人は弥生人の延長」「弥生人によって連作できないイネを、水耕稲作の技術で克服し、2500 年の歴史を経て現在も続いている」「一粒のイネがワンシーズンで 2500～4000 粒に増える穀物の中でもダントツ」との自説を語ると「今まで聞いたことの無い。それホント？」とする仲間の声が上がった。それを契機に関連の拙文を何本か纏めることが出来た。

調べてみると、例えば「当時東シナ海を中心に倭人＝海人（あま）族が活躍していた」ことまでは学者が論じるが、肝心の移動した舟＝船のことになると、考古学資料が乏しく論文は少ない。いわんや「当時のことば」については皆無に近い。私の仲間の野崎豊氏は、海上輸送には「ヒョウタンとカラス」が活躍したと、信じ難いような教えを戴いた。学びを進めると野崎先輩の説は、神話＝記紀や万葉集に登場する説話で当時使っていた「ことば」もこの辺に存在しそうである。

果たして私に中学生に解ってもらえる文章力があるかどうか自信ありませんが、いわんやその道の専門家でも、論文でもありません、おしゃべり好きなオジサンの日頃の自説を、エッセイ風にまとめてみました。素人の「ざれごと＝戯れ言」として聴いて欲しい。

1．日本民族の起源を考える

「言葉の起源」を考えると、日本語の起源がすなわち日本民族の起源でありそうです。そうすると先ず日本人の起原を考えなくてはらない。日本列島（以後列島と表記）が中国大陸（以後大陸）や朝鮮半島（以後半島）と繋がっていた今から 2 万年（最後の氷河期）ごろまでに、アフリカで発生した人類（約 30 万年前）のうちモンゴロイド古族（黄色人種）が大陸を北上し当時の日本列島に到着した。その後の温暖化で、朝鮮半島と切り離され列島の住民は孤立し、縄文人（新石器時代）として独自に発達しながら、今日の弥生人＝現代人の人種が生まれた。

猿人から人間になった時点で、二足走行と共に脳の発達から「話しことば」を持った。以後人種ごとに違う言葉を持つことになる。その意味で、縄文人は「縄文語」があったことになり、通説では古モンゴロイド系の古代語であるアーリア系サンスクリット語（古代インド・ヨーロッパ語族系≒梵語）を使っていたことになる。

縄文時代とは日本固有の時代区分であるが1

万3000年間続いた。初期の縄文時代は今から一番近い氷河期で海水位が低く、大陸と陸続きでした。今の瀬戸内海は草原で寒い時代です。毛の生えたマンモスが闊歩（かっぽ）していました。現代も底引き網にマンモスの骨や牙が引き上げられて話題になりますね。縄文時代の中頃（約7000 年前）には地球が暖まり海水が増え（縄文海進）今の山口県は殆ど海中に消えます。その後地球が再び冷えて、日本列島が現在の形になりますのは、3000～2500 年前の縄文末期・弥生時代の始まりの頃になります。

その後中国南部の海洋系異民族と先住民の縄文人が和合合体し、新しい人種の弥生人が誕生することになり、縄文人の残像はアイヌなどの少数民族として今日まで続いている。（琉球・九州南部・高知の一部にも）

先にも述べた通り我々現代人は、人種的には弥生人の子孫であり、大切なのは縄文人の流れを引いていることだ。当然「古代話しことば＝古代語」もアーリア系サンスクリット語の系統を含んでいる。（縄文系）

弥生人の歴史は約 2500 年から 3000 年と比較的短いが、意外と話し言葉の実態は判らない。この時代にインドから発生した「水耕稲作」が中国の南部江南地方を経由して、黒潮（暖流）に乗って対馬海流・日本海海流・派生的に瀬戸内海に沿う形で、新しい文化・技術が伝来した。弥生文化は、連作が可能な海洋系水耕稲作文化でもある。縄文末期には陸稲（おかぼ）の栽培が始まっていた。しかし「イネは連作障害が出易い穀物」のため小規模な焼畑で移動しながらの耕作であった。

2. 弥生末期の日本人は大陸と交流

大陸沿岸部と朝鮮半島西側そして日本列島のシナ海を中心にした交流の痕跡は、考古学界の定説として、倭人族＝倭族＝海人（あま＝かいじん）族が活躍した。

水耕稲作（主に日本列島）や鉱物資源（主に朝鮮半島）の分野で飛躍的に発展した時代が、弥生時代（世界的には青銅器時代）である。勿論人口も縄文時代に比べ急激に増加します。

特に、二世紀前後には邪馬台国が存在し、卑弥呼が活躍したと、文字文化の先進地である中国の『魏志倭人伝』に記載され、彼女は魏王の好む、奴隷（縄文人＝古族）100 人や山繭（やままゆ）などを献上し、お土産に銅鏡など多くの品々を賜った。

卑弥呼たちは大陸の言葉が話せ、文字も読めたことは明白である。中国北部で発生した道教の祭祀を卑弥呼は身に着けていて、その意味で彼女は在来の弥生人とは違っていた。然るに「ことば」に関して、日本列島側には証拠となるものが存在しない。文字を持たない民族の悲哀なのか。当時の倭人＝日本人は大陸の文化も当然文字も漢文も知っていた。記憶と口承による伝承や祭祀に伴う歌舞などで、ゆっくりと時代は流れていく。

ちなみに地球上には 3000～6000 語（類似方言も含めるともっと多いのでは）が確認され、今でも残っているのが約 1000 語で、その内文字を持っているのが 300 語、残りの 700 言語は文字を持っていないとの説が有力です。

（国家になると全て文字を持った言語になります。）

3. 古墳時代は独自文化

古墳時代は世界の中でも特有な時代区分です。お墓である古墳を時代区分にしているのです。4～500 年間も続きました。特に前方後円墳は列島固有のお墓です。中国や朝鮮半島の影響を全く受けていません。逆に考えれば彼らの文化を拒絶し無視続けたと考えます。固有の文化が醸（かも）し出されていたのです。

弥生末期には海洋系農耕民族の先住民＝弥生人の祖先崇拝的の祭祀（太陽中心の自然崇拝）から、大陸系の祭祀（星＝中でも北極星を中

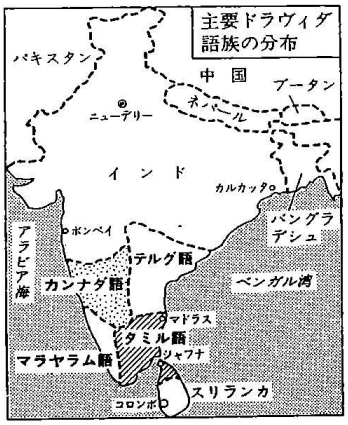
心にした北辰信仰を持つ騎馬民族系）に移行しています。多くの弥生集落を支配する新しい民族の到来です。武器（馬）を持たないで海を渡って来た少数の騎馬民族が、民衆から崇敬され支配者層に君臨したのです。本国の大陸や半島の文化を、表面的には一見無視し、拒否しながら、新しい支配体制を確立したとする『騎馬民族王朝説』を江上波夫（1906～2002）先生は戦後直後に発表し、批判も受けましたが学説は生き続けています。

彼らは政治的には支配者層に君臨しましたが、弥生人の持つ「文化＝ことば」まで変更することは出来ませんでした。それどころか弥生人＝弥生社会に融けこもうとしています。騎馬民族（遊牧民族）でありながら農耕民族の風習を多く残こそうとしているのです。今の天皇家も明治天皇以来、天皇が皇居に水田稲作を、養蚕を皇后が古式にのった行事として継続しています。私は江上先生に近い考えを持っています。言葉だけは騎馬民族系（漢民族も同系）ではなく、海洋系が続きました。それを裏付ける学説があります。

4. タミル語が黒潮に乗って
・・・大野晋　説

話し言葉は考古学的な物的証拠を残しません。考古学の限界です。歴史学は文章が全ての世界です。文字の無い時代の話ことばを検証するには、言語学、中でも比較言語学の大家であった、大野晋先生（1919～2008）の説が、私の「海洋系水耕稲作伝播が弥生人を生んだ」とする考えに一致します。下記は平成 7 年（1995）7 月 8 日朝日掲載の記事です。

この記事は大野晋先生の『日本語の起原』（岩波新書・1953）が発行されベストセラーになり、初刊から 20 年たち新版を出された機会に、若手の学者が先生を囲んでのシンポジュームでの資料の一部です。



大野晋著『日本語の起源・新版』（岩波新書）から

タミル語　インド亜大陸の東南部、現在のタミルナドゥ州を中心とした地域と、スリランカ北部に住むタミル人、計約五千万人が話す言葉。亜大陸北・中部で話されているヒンディー語などアーリア語族に対して、亜大陸南部で話されるドラビダ語族の一つ。同語族の中でも紀元前後成立のサンガムという詩歌集をもつので、正確な古代語研究ができる。インド東部には、この二大語族と系統を全く別にするムンダ語がある。

平成 7 年（1995）7 月 8 日　朝日掲載の記事

先生はインド南部のタミル人が、水耕稲作の技術を持って、太平洋の黒潮海流（暖流）が大陸に沿って北上したとする考古史学を押さえた上で、専門の比較言語学の手法を用いて新説を論じている。詳しくは先生の説を読み解いてください。私は当時あまりピンと来ませんでした。弥生時代を学ぶ内に改めて、大野説が私の考えに一番近いと気づいたのです。

「弥生人の末裔の現代人が、縄文語の残像を残しつつ、水耕稲作文化の里である古代インドのタミル語を踏襲している」との説は、説得力があります。先生亡きあとも燦然（さんぜん）と輝いている説と私は思います。

タミル語の話しを仲間としていたら「ネパールとブータンの間にあるヒマラヤの山あいのシッキム地方（現インド領）に住むレプチャ族の言語と、日本神話や今の日本語に共通点が多いとの説も有力」と、私の身近な仲間のうち文化比較論に詳しい中山亘先輩からのアドバイスを戴いた。安田徳太郎（1898～1983）博士が調査研究し提唱されているとのことです。今後学びを深めたいと思う。

ブータンの国王夫妻が新婚早々に、わが国に

訪問され、「幸せの国＝国民総幸福」を掲げる姿勢は、訪問先の随所で報道されて好感を得た。同じ人種を祖先に持つ近親感も共有できた。もしかして安藤徳太郎先生の説が最も有力な説かもしれない。

2011 年来日中の国王夫妻　朝日掲載

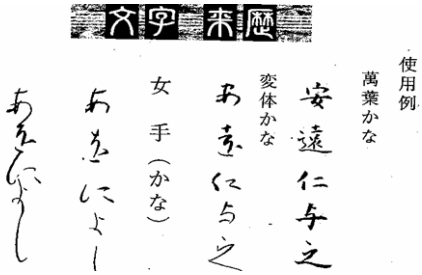
以上で古代日本人（縄文人と弥生人）の「会話＝はなし言葉」について私の考えを述べました。次は日本語の書き言葉＝文字・文章について考えましょう。

5. 文字の導入を古事記と万葉集で見る

日本の最初の国史は『古事記』と『日本書紀』であります。編纂（へんさん）されたのは西暦 712 年と 720 年ですが。その後の扱いは大きく別れています。その理由を古事記は「天皇家のことで国史とは言えない」。日本書紀の方が「天皇家以外のことにも触れていて国史と言える」と学んで来ましたが、私はそれに加えて別の考えがあります。

日本書紀と古事記は共に漢字を用いていますが、正式な漢文表記で書かれているのは日本書紀で、古事記では説明文などは漢文に近い表記なっています。しかし当時発音していた「はなし言葉」のうち、固有名詞（神様の名前や地名など）歌謡（当時歌われていた謡曲）は、一つの発音に一文字の漢字を当てて表記しています。場面によって同じ発音でも引用漢字が違う「ややこしさ」や「煩（わずら）わしさ」が、当時の国民に公開されなかった原因の一つと考えます。

下図は山陽新聞に載った、高木聖鶴先生（1923～　文化勲章 2013 年受賞総社在住）の囲み記事を引用します。**2003.15.11.6 掲載**



万葉仮名の最初の原語は右端の「行」のように「安遠仁与之＝あをによし」で始まります。次が変体かな、最後の二行に女手（かな）の文字です。当時の発音を敢えて漢字で充てていることが判ると思います。

古事記も江戸期に入り本居宣長（もとおりのりなが）（1730～1797）の『古事記伝』により多くの人々の目に触れることになります。日本書紀は曲がりなりにも漢文なので、漢文の解るできる知識人であれば、誰でも解読出来ました。編纂された当初から公開され国書としての役割を果たしました。

その後、漢文は国家の公用語＝男性語として近代まで続きます。教養人の必須知識（学問）でした。日本書紀は、年代も構成も他国（中国）を意識して編纂されています。律令国家を目指す当時の官僚の意気込みが感じられます。

古事記から約 100 年後の万葉集も古事記に似た書き方です。内容の内、歌謡などに類似が多く、私は現代語訳しか読めませんが判読は万葉集との兼ね合いで理解されているようです。

6. 歌と踊りで伝承

古事記や万葉集の歌詩の中に当時（私は弥生社会以降）の「話し言葉」が隠れていると前段で申しましたが、実は話し言葉しか持たない民族に共通して残っているものがあります。

「音曲と踊り」＝歌とダンスです。ハワイのフラダンスは私もワイキキの浜で直接観させていただきました。可愛い幼女から年配の貫禄ある女性の身振り手振りは感動的です。ハワイの歴史を表現

しているとの解説ですが
歌の歌詞の意味は解らなくてもなんとなく理解できます。台湾のアミ族の民族舞踊も同様な感銘を受けました。

日本にも記紀に出てくる「アメノウズメ」が舞踊りますと、天照大神が・・・・・・の神話は有名です。最近はテレビの番組でも世界中各地の少数民俗を紹介していますが、文字を持たない民族でも必ず儀式としての歌舞音曲は、老若男女共とても楽しそうです。楽しみながら大切なものを身に付けて、後世に伝えているのです。

古事記や万葉集の中でも歌詩の部分は、当時の人々も大切にしていた部分と思います。リズムを付けて覚えていたのでしょう。

池澤夏樹（1945～　）氏は最近まとめた『日本文学全集の第 1 巻』で「古事記は口で語り継ぐ口承文芸」「ことばのリズムを大切にした」と親子二代の研究成果を述べている。（山陽新聞 2014. 8. 1）私も同感である。私は歌も踊りも不得手だが観賞するのは楽しい。

7. 文化の発展が文字を必要とした

前段で少し触れましたが、話し言葉はあっても文字を持たない言語が多いのが世界の実態です。民族ごとに最低固有の「はなしことば」を持っています。少数民族も隣接する他民族と交流が発生すると、今の通訳みたいな役をした、知識人（先人・老人＝指導者）がリーダーになって部族を引っ張っていきます。それが拡大し、集合したのが国家です。国家になると税金や兵役など色々な取り決め（現代の法律など）が必要で、文字＝書き言葉が必要になります。多民族で構成された国家になりますと、民族毎の言語を並列式に使う公用語を複数持っている国があります。そちらの方が多いかもしれません。（14 項参照）

日本列島が弥生・古墳時代に入り「大王」や部族のトップが、権威の象徴として大形プロジェクト（古墳などや水田の土木事業）を、民衆を動員して遂行します。文字なしでは設計図などもなく苦労したことでしょう。倭人＝海人族の海洋交流も活発でした。四方を海で囲まれている日本列島は、大陸のような異民族の襲撃も無く、防御のための万里の長城を築く必用は無かったのですから、侵略・防御の面では好都合でした。

徐々にではありますが、古代中国の思想である道教や儒教も入ってきました。道教は日本の神々と結びつき大衆に溶けこみ今日まで「暦」や「還暦」「青春」など身近な風俗や言葉として残っています。儒教は人の生き様を教え、特に江戸時代に幕政の柱に置いたお陰で、民衆の「こころの柱」として現代にも生きています。ブラジルでのサッカー観戦者が自発的に行なった「ゴミ拾い」は日本人のこころ＝マナーを世界中のサッカーファンに感動を与えました。

8.　文字は仏教経典（お経）で学んだ

地域ごとの豪族の Top が縄張りと見栄を競い合う時代（古墳時代まで）から、他国と張り合う国体を作るには、中国のような律令国家を手本に、建国の基盤となるものが必要でした。

インドで発生した仏教はヒマラヤを越えて中国に入り（大乗仏教）、仏教を利用して発展しています。日本では聖徳太子らの天皇家等有力な豪族が、先祖伝来の「神」に加え仏教を「国教」として保護擁立します。当然仏典を学び、国は専用の学問所も造りました。経典を諳んじる言葉だけでは理解説明できない、教理・教義は全て漢文字あるいは梵字（古代インド文字）です。

仏教の伝来が文字の伝来とする説が定説です。

その年代は学者によってまちまちですが、ここでは六世紀初頭としておきます。

唐(618～907)の高僧である鑑真(がんしん)(688～763)が 753 年に大量の経典を持ち込み、日本に仏教の真髄(しんずい)を教えました。当時の学徒は水に飢えた砂漠のように、必死に経典に取組みます。漢文を経典から学びました。当時は世界最先端の学問です。

既に卑弥呼の時代(二世紀ごろ)から、中国が文字を持つ、漢文の世界の存在は知っていました。当時は交流も限られていましたから、自分たちには文字を持つ必用性が少ないと思ったのでしょう。

仏教伝来は、日本列島にとって水耕稲作伝来以来と同等な画期的な出来事でした。当時の知識人は「先見の明」があったことになります。

漢文字を自国風に取り入れたと、私は概(おおむね)以上の考えを持っています。

9. 弥生語と漢字の融合

古墳時代まで使っていた列島の言葉を「弥生語」としますと、話し言葉を文字言葉に置き換える必要があります。一般には翻訳ですが弥生語には当時文字が無いので、厳密には翻訳とは言えません。前節でも述べた通り発音ごとに漢文字を当てがいました。古事記や万葉集に苦労の跡が伺い知れます。

幸いなことに漢字は中国の象形文字(亀甲文字)の表意文字(文字にそれぞれ意味があり、形に模した文字)でした。

注＝今は亡き漢字学者の白川静(しらかわ しずか)(1910～2006)先生の著作に詳しい

表意文字に意味のあることが幸いして、漢文導入の早い時点で、「加点＝レ点」や「ヨコト点」を発明し、漢文の左肩に付記して表記しました。読み下し時点で訓読み＝日本語読みにしたのです。

現在日本で漢文を習いますと、必ず朱で付記されています。本来の漢文には当然ですがありません。読む時も中国の発音です。漢文を訓(日本語)で読み理解するのは日本人の発明です。同じ漢字圏のベトナムにも日本流の訓読みがあるそうですが、今はベトナム語(フランスの植民地の影響を受けてローマ字表記です)になっていて、漢字は一般の人には解らなくなりつつあります。

漢文字導入時点の当初から訓読み用に特別な工夫をするなど、先人の知恵に脱帽です。

10. 近隣国の言語の事情

ちなみに漢字文化圏は中国を中心に東アジアに国際語として広まりました。朝鮮・日本・ベトナム・台湾・琉球であります。

お隣の朝鮮は自国の民衆に漢字漢文は身に付けるのが困難と判断し、ハングル語を開発しました。音表文字で、ある種の記号のように見えます。意味はありません。現在も隣国韓国は漢字教育を続けていますが、日常はハングル語です。北朝鮮ベトナムは全く漢字を使っていません。その上現代の中国漢字と日本の漢字では、同じ漢字でありながら異なる略字を使っていて、違和感があります。

朝鮮半島は中国と陸続きですから、太古の時代から中国の影響を受け続けて来ました。当然漢文字も早くから入ってきましたが、話し言葉は朝鮮族の言葉です。朝鮮語を漢字で表現するのに苦労をしたようです。結局書き言葉は漢文に頼るしかなかったのです。

西暦 1446 年、当時の政権李朝は、『訓民正音』の令を公布します。それがハングル文字で、韓国語で「大なる文字」の意味だそうです。ハングル文字は母音 10 と子音 14 からなる音表文字です。漢字は学校では習いますが一般的ではありません。現在知識人は漢字を併用し、一般人は姓に漢字を用いる程度です。金(キム Kim)李(イ・リ Lee)朴(パク Park)崔(チェ Choi)鄭(チョン Chung)の五大姓が半数を占めます。これは個人

が先祖の姓を用いる夫婦別姓の習慣から来るものです。勿論普段書く時はハングル文字で書きます。

日本の統治下では創氏改名（1939 昭和 14 年）が強制され、日本流の苗字に換えられた不幸な時代もあったことを付け加えておきます。現在でも朝鮮民族は、南北朝鮮と中国の旧満州に大きく、三つに分断されています。

台湾も中国に近いのですが、歴史的にはマレー・ポリネシア系の 12 の部族（先住民＝原住民）がそれぞれの言葉を持っていましたが日本の統治（1895～1945）下で教育やインフラが進み、その後の大陸から漢民族の到来で現在は中国語になっています。

琉球＝沖縄は方言の項で触れます。ベトナムは先に触れました。漢語は廃れても中国から入った儒教はベトナム・朝鮮・日本に根強く基本的アイデンティーとして残っています。本家である現代の中国が、共産社会に変身して、儒教や道教並びに仏教が廃（すた）れているだけに奇妙な現象です。

11. 日本語の二重構造（真名と仮名）

漢字を学びますと漢字には一つの文字に書き方が、大きく五通りあります。篆書（てんしょ）・隷書（れいしょ）楷書・草書そして現代は簡体字で表記します。知識として学ぶのは大変なことになるのです。

ハンコの文字は篆文字で刻印します。篆刻文字として日本でも馴染みが深いですね

日本は早い時点で「仮名文字」を発明し、元の漢字を「真名字」と称しますが、仮名以外にも漢字に無い日本語は国字として創作して、逆に中国に移出させているのです。

国字の例　榊（さかき）は木と神をあわせた国字の代表格他に国字の例を調べるのも面白いと思います。

現代の外来語やカタカナ語なども同様な現象ですが、時代が違いますので別の項でまとめます。

早い段階で漢字を利用し、独自に創作した「仮名文字」で訓（日本語）を表記します。片仮名と平仮名の使い分けも致します。平仮名は万葉仮名（幕末期の文政元年 1818 年の時点で 973 文字）から発展したのですが、平安文化を代表する女流歌人が今に残る文化を担いました。政治向きは当時の国際語である、漢文で主に男性が公式文として使います。話し言葉と書き言葉は女性用語と男性語＝公式用語の二重構造が日本独特の文化を形成することになります。

漢字の持つ表意性を利用して、日本語を漢字で書き、微妙な日本語の持つ言葉を簡略に表現しました。仮名だけですと長くなり、一見して目で理解することが出来ません。仮名文字で話し言葉を日本流にアレンジしています。仮名の記号性は話し言葉の中に生きているのです。その意味で日本語の二重構造を旨く使い分けています。

「漢文」から「読み下し文」そして「候（そうろう）文」へと発展移行し最終的には「漢字と片仮名との混合文」になり、戦後は漢字と平仮名になりました。昭和 24 年小学校に平仮名で（親の時代は片仮名）自分の名前を、やっと覚えて入学した頃が懐かしく思い出されます。昭和 21 年に通達が公布されています。

説明の途中でも申しましたが、漢字文化圏の中で、漢字を自国流に発展させているのは日本だけです。お隣の朝鮮は漢文・漢字の難しさからハングル語を開発しました。

本家の中国は現在多くの多民族（約56との説が有力）を抱え、公用語だけでは対応出来なくなり、難しい漢字を略文字に替え漢字文化=漢民族文化を普及させようと必死です。具体的には一般に「簡体字」と呼ばれている『国家通用語言文字法』を中国共産党が 2001 年に制定しています。特に最近ネパール等の少数民族の反動的動きに敏感になり、2011 年に再度通達を出して簡体文字の普及に努めています。

廣＝日本では広の略字ですが、中国の簡体字では
「广」を充てています。広州は广州と表記します

あまりにも酷（ひど）い略字の横行で 4000 年の漢字歴史が泣いているように私には見えます。

以降は次回をお楽しみに。

編集後記

○今回は8月のお盆に合せて帰省した家族に先祖のことを語った田中康之氏に登場していただきました。高齢にも関わらず健筆に感謝して居ます。当先史古代研究会での出会いが何かの奇遇を感じます。

○山田良三氏の2回目の連作も「力」が入りました。樋口俊介氏の四国遠路も土佐の「修行の道場」が終り、次は伊予に入ります。

○「日本語で生きよう」は中学生を対象にしたエッセイ風の論文です。原稿用紙 120 枚になりました。3回のシリーズでお届けします。

○次の例会は 10 月８日（水）13 時 30 分から友愛センターで開催します。講師は地元小学校で郷土史を分り易い授業をなさいました、中西厚会員に「上道（かみつみち）の物語」と、丸谷憲二会員に「草ヶ部大廻り小廻り山城の考察　古代迎賓館説」をテーマに多彩な写真を駆使して報告いただきます。お楽しみに。

○当会は例会を各月に開催（8 月は休み）し、主に会員の事例報告を行なって居ます。
“きび考”は年 2 回発行し寄稿文を随時募集して居ます。今回は田中さんから初投稿を戴きました。会員は例会参加者を通じて、こちらも随時入会できます。会費は年 2000 円です。

“きび考” 第 10 号

2014（平成 26）年 9 月 31 日発行

発　行　先史古代研究会　会長　丸谷憲二
事務局　702-8002 岡山県岡山市中区桑野 504-1
山崎泰二方
電話＝086-276-6654　FAX=086-276-2241
ﾒｰﾙ＝senshi@bosaisystem.co.jp（事務局）
編集委員　山崎泰二（事務局長兼編集委員長）
井上秀男　延原勝志　樋口俊介
濱手英之　丸谷憲二（会長）